烈祖成績

十四

烈祖成績巻之十四

慶長十九年（一六一四）十二月
至元和元年（一六一五）五月

慶長十九年十二月朔、松平利隆・其弟利継（忠継）・森忠政・有馬豊氏等河水を渉り天満に入り陣す。監使服部權大夫・島彌左衛門上言するに、敵天満の地を焼くと雖へども人家猶ほ残る者有り。兵備せしめよと。神祖笑ひて曰はく「六日の菖蒲なり」と。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事○抱朴子曰、以五月五日日中捕萬歳塘（とう＝堤）蜍（じょ＝かえる）陰乾帯於身、辟五兵。六日則不中用。按ずるに、皇朝、端午の節を以て菖蒲を闘はす和歌会有り。六日には則ち用無し。故に是語有り。其義一なり。浪花戦記曰はく、初め神祖、松平利隆、城和泉守の言に従ひて軍機に後るるを怒る。是に至り諸将の兵を天満に進むるを喜ぶ。故に此の語有り

是夜、大野治長等失火す。城兵奔走し之を救ふ。天満・京橋の諸将皆謂ふ、城中内応者有り火を挙ぐと。争ひ之を攻めんと欲す。松平利隆先づ進み諸将相継ぎて進む。城兵堅く拒ぐ。鉛弾雨と下（ふ）り我兵傷つく者多し。諸将兵を斂（あつ）めて退く。駿

府記・德川記・慶元記・難波戦記○松栄紀事曰、神祖使本多正純・成瀬正成・安藤直次巡察仙波形勢。三使伝旨諸軍。列柵迫城。事竣、帰住吉行宮。城兵見之、意其攻城向仙波連放鳥銃。仙波至城、有橋二三十城兵焼之。唯今橋・高麗橋猶存。利隆・忠継等入天満。松平周防守・岡部内膳正・市橋下總守・別所豊後守等相継陣列。城兵自焼西南街市。而城下街市未焼、以為可拠以防禦。是日亭午云（ママ）□今橋。焼蜂須賀至鎮営前街市煙塵漲天、不能見城兵多募。故訪（諸）将不出。戦与諸書異。附以備攷

石川忠継（總カ）、高麗橋前に陣す。銃を放ち敵を拒ぎ橋を焼くを得ざらしむ。神祖望見し、加賀爪甚十郎忠澄を以て使と為し

忠澄、備前守故尚子。後民部少輔

忠總に命じて曰はく「橋を焼くは我欲する所なり。今天下の兵を以て此城を攻む。一橋の存亡に繋（かかわ）らず。然れども命下るを待たずして軽戦すべからず。且汝が兵寡く敵の乗ずる所と為るは恥なり。宜しく仙波の諸将と同陣し彼の動静を視るべし」と。

難波戦記　係十六日曰、小栗又市・山本新五左衛門還自陣営言曰、舟場城兵欲焼石川忠總営　前橋、忠總飛銃拒之。敵不能焼橋。蜂須賀至鎮大家也。陣営相去不遠、諸（請）使　至鎮代忠總守之。神祖不応、永井直勝亦言曰、敵若焼橋攻城甚難。宜亟命至鎮代之。神祖大怒取眉尖　刀擬之。直勝驚走。松平右衛門入火救護

得免。神祖徐曰、此橋素我所欲焼也。然焼橋則敵必謂、不復囲城攻之。故置之。今敵焼橋此幸也。以日本国兵、攻此城、何係一橋之存亡乎。叙事頗詳。然創業記・駿府記・松栄紀事、皆係是日。今従之　藤堂高虎、活玉に進軍す。城を囲むこと日に急たり。松平政宗、仙波に陣す。敵兵棚楼を鐘木橋に構へ以て之を射る。　拠松栄紀事。鐘木橋在天王寺西南　銃矢雨の如く士卒軍を持する能はず。高虎往き之を救ふ。弓材銃器の精錬者を選び棚楼を仰ぎ射る。敵兵複び登る能はず遂に政宗の兵をして其営を保つを得しむ。　高虎行状○野友元所撰山本義守（安）碑曰、山本権兵衛義守（安）父七介義純也。仕松倉氏。是冬松倉重正、与藤堂高虎曰（同）学（営）張軍。義純以奇計設柵隍口、超諸将之軍。城中放炮如雨多傷者。義純亦被創。然不退縮、守之一昼夜。軍営不動。大将軍嘉重正之功。是日、重正之兵岡崎與十郎中炮死。其骸猶在隍口。日暮重正問骸所在。僉曰、木（末）収、重正之（大）怒欲自往収之。義安年十九、在席末。請収之。重正悦許之。義安提盾。奮然疾馳飛炮中盾如崩、或砕刀鞘。義安排盾至隍口。負其死屍而帰。重正褒賞之同列悉服其。而不書其在何時。蓋此時也。故附于此　海西の諸将も亦仙波に屯す。城を距つること数可。天王寺口の諸将已に城東方に迫り鷺島の諸将進み池隍に迫る。唯

だ天満一面のみ河水を隔て高麗橋雨北(西)に通じ最も要衝たり。寡兵にして守り難く、故に松平忠継をして石川忠總に代り橋を守らしむ。忠總陣を其南に移す。　松栄紀事

神祖梓人中井正次を召し命じて曰はく「近日、将に営を茶磨山に移さんとす。宜しく舟場の人家を毀ち以て陣営に充つべし」と。　駿府記・徳川記・慶元記・松栄紀事

二日、神祖茶磨山に登り城守の形勢を望む。大将軍も之を聞き亦平野より来謁す。本多正信・正純父子・成瀬正成・安藤直次扈従す。　年譜・創業記・駿府記・家忠日記・徳川記

○松栄紀事曰、駿（ママ）神祖、按行仙波陣営松平政宗等従行。按ずるに、駿府記唯正信父子・正成・直次のみ扈従し、其余来ずと。難波戦記に拠れば政宗扈従するは四日に在りて是日の事に非ず。故に取らず

神祖、小出(十四)英及び其弟信濃守(十四)親に命じ堤を曝布郷に築き以て京師に来往するに便たらしむ。松栄紀事

三日、本多正純をして陣営を巡視せしむ。昏に及び帰りて言ひて曰はく「舟場は広く天満は狭し」と。乃ち松平忠継をして天満より移し舟場に陣せしむ。　浪花戦記

曰、正純言曰、我兵所備天満東西僅六町、舟場過二十町。而所命諸将毎一万石賦三間。故軍士堆畳、後軍従観前軍之戦、不能赴援。因有此命　是に先んじ、神祖、本多正純・商人後藤光次をして書を織田有楽に遣はし秀頼に講和を勧めしむ。是夜、有楽、正純・光次に復書して曰はく「数日、右府を諫むるも竟に容るる能はず。事為すべからず」と。神祖二人をして又書を致さしめて曰はく「諫（かん）行はれずと雖へども、更に之を慫慂（しょうよう）す（誘いすすめる）。願はくは有楽城を出で会議せよ」と。　慶元記有楽作雲生寺。今従駿府記・徳川記・難波戦記　諸将竹牌を四面に列し斉進し城を囲む。城を距つること十町、或は五六町。　創業記作二町、或二日（三町）。徳川記十町或十五町。難波戦記五町或六町。今従駿府記　大将軍、語（諸）軍をして一時に攻城せしめんと欲す。神祖、以為へらく、城抜くべしと雖へども我兵多く損ず。計を以て之を取るに如かずと。故に攻めずして之を疲れしむ。　徳川記・難波戦記　城外に箐叢林（そうりん）有り。眞田信仍出兵し林中に翳れ鳥銃を放つ。松平利光の兵毎日死傷するもの多し。

是日、利光の前鋒奥村摂津守之を奪ひ城に迫り以て己の功と為さんと欲す。信仍の諜其謀を知り之を告ぐ。信仍兵を引き城に入る。摂津守、部兵を率ゐ之を攻む。敵一人として在る者無し。摂津守兵を引き空しく還る。信仍、兵一人をして睥睨（城壁上の垣）に乗らしめ之を姍笑（あざわらう）す。摂津守の兵皆忽ち隍を超え壁に縁り競ひ女墻（低い垣）を毀たんと欲す。城兵急ぎ銃矢を放つ。摂津守狼狽して帰る。利光、其の、法を犯し軽進して功無きを怒り之を黜す。　難波戦記・大阪記・浪花戦記○慶元記曰、利光分軍為二。奥村摂津守将左軍、山崎長門入道間斎対右軍。間斎老将摂津守少壮。鋭気常思元（先）間斎。間斎建旗島地。列兵早（皋＝みずべ）地。摂津守之兵見之誤為間斎迫城。故摂津守急進故（攻）織（城）。竟為眞田所破。間斎堅陣不動。摂津守恥之迫（遁）于高野山。興（与）諸書異。附以備致（攷）

大将軍、軍野（平）より移り岡山に陣す。尾張宰相義直・遠江宰相頼宣、天王寺の側に陣す。是に先んじ、城将南條中務大輔潜かに藤堂高虎に通謀す。我軍を引き入城せしめんと欲す。　冬夏事記曰、中務大輔通謀于井伊掃部頭。請復父祖旧封伯耆賜印章。截雉堞柱於地中。約導我兵。慶元記曰、中務大輔之旧臣山田

越中勧為内応。不知孰是。今従難波戦記　燈籠を掲げ期を示すを約す。放銃に鉛弾を用ゐず。四日黎明、石川數矩守る所の楼櫓失火す。數矩十八年、生（座）九（兄）玄蕃頭康長事被逐。見上文。今在大阪城。浪花戦記曰、秀頼甚龍（籠）肥後守使之伴食　越前少将忠直の前鋒、本多成重・本多冨正等中務大輔の謀を伝へ聞き以為へらく、内応を為し火を挙ぐと。故に兵を進め濠を超え眞田二城に迫り雉堞を壊さんと欲す。冬夏事記曰、二城之南有小山曰姨瀬柵山。城兵時々使歩卒故（放）銃。本多安房守与諸将議欲取之迫城　井伊直孝及び前田利光の前鋒本多政重・横山長知並進し濠に臨む。朝霧昏濛として東西を弁ぜず。我が軍の城に伝（傳つ）く（ぴたりと付く）を知らず。日晏（ひぐれ）に霧晴れ始めて之を覚る。眞田信仍・伊木遠雄、神気不撓。士卒を指揮し銃矢を発し之を拒ぐ。加賀越前の兵多く斃す。徳川記・慶元記・難波戦記　利光の隊将成瀬内蔵助和正　和右衛門正一第二子。隼人正正成弟　赤麾を秉（と）り指揮す。城兵呼はりて曰はく「赤麾の将の挙措観るべし。請ふ、一矢を進めん」と。和正馬を進め濠上に立つ。敵銃を放ち之に中つ。左胸を傷し馬を墜つ。従兵救去す。然れども

死せず。成瀬系図　直孝の前鋒木投（股カ）右京先登し被創す。成重・富正、兵を収めんと欲すれども士卒銃矢に困じ進退する能はず。忠直の弟出羽守直政時に十四歳、進み濠を超えんと欲す。其傅（ふ）天方山城守之を抱き固く諫む。天方山城守道興、見天正七年。即其人耶。或其子乎。未詳　直政曰はく「然らば則ち吾此に在り。宜しく馬標を濠上に立つべし」と。部兵其言の如くにす。時の人其の将略有るを知り之を称む。松栄紀事曰、直政先登超濠。今従難波戦記。紀事又曰、直政時十五日（歳）。冬夏事記曰、十三歳。按ずるに、直政、六年辛丑生を以て実は十四歳。二書誤れり　日既に亭午。両軍悉力攻守す。我軍の死者百余輩。城兵一人として死する者無し。慶元記日、我軍死者二百余人。今従駿府記　監使交（こもごも）馳せ兵を収めんと欲するも衆軍聴かず。争戦弥（いよいよ）厲（はげ）し。監使之を行営に報ず。神祖・大将軍大いに怒り安藤直次をして兵を収めしむ。直次馬に策（むち）ち鉛弾を避けず諸軍に号令し兵を収めて還る。大将軍諸軍の違令軽進し敗を取るを怒り神祖に告げ之を重典に寘（お）かん（罪とする）と欲す。神祖曰はく「当に此の如き時、軍法を犯する者も亦多く得ること易

からず。之を赦すが可(よ)きなり」と。遂に釈し問はず。時の〔人カ〕其英略に服す。年譜・創業記・駿府記・家忠日記・徳川記・難波戦記・冬夏事記　南條中務大輔事発覚し、秀頼捕へて之を誅す。徳川記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事○慶元記曰、磔中務大輔於城中。使諸将分殺部兵。今従上諸書　神祖、中坊左進(近)秀政を召して曰はく　秀政、飛騨守秀祐子　「聞くに、大阪城兵妻子を大和に匿す。捜し之を捕ふべし」と。徳川記・難波戦記・冬夏事也（記）

是日、神祖人(又)茶磨山に登り陣営を望む。扈従の士十余人を過ぎず。諸将来謁し藤堂高虎の営に至る。城兵之を知り銃を発すること雨の如し。神祖未だ嘗て擐甲せず。神色自若たり。駿府記・松栄紀事　群臣轡を執り回(かえ)るを請ふ。神祖聞かずと為すも群臣固く諫む。神祖曰はく「死生に命(めい)有り」と。猶ほ進み已まず。横田重量来、衆を排して曰はく「銃矢交(こもごも)下り人の堪へ難き所、此れ公天資に之を好む。此より して西す。舟場の地は城兵頻りに大銃を放つ。我軍陣列を成し難し。此地に赴くを請ふ」と。乃ち馬首をして西せしむ。神祖首肯し馬を進む。舟場に至り蜂須賀

至鎮の営に入る。城を去ることすこぶる遠し。銃矢及ぶ能はず。人皆重量の軍事に長ずるを称む。難波戦記。本書係二日。拠駿府記、蓋是日事也。故置于此 松平政宗出で陣営を巡る。中路に謁見す。政宗・高虎扈従す。晡時（日暮れ）住吉行営に還る。政宗諫めて曰はく「敵動静を伺ふ。其術多端。軽騎し輒ち出づべからず。或は厨人を賂し毒を飲食に寘（お）くも亦料るべからず。宜しく嘗食（毒見）を置くべし」と。神祖、之を然りとし、始めて嘗食を置く。難波戦記

五日、九鬼守隆を召し大阪戦艦を奪ふの功を褒めて曰はく「城兵或は夜出で寇鈔（こうしょう）（掠奪）すること有り。汝復び戍船を泛べ港口を固守し以て之を防げ」と。監使横田重量・間宮権左衛門を召して曰はく「天満・舟場の兵須らく垣を築き以て発銃し我兵をして傷損無からしむべし。今死傷を顧みずは則ち城立ちどころに抜くべし。然れども兵多く死傷せば則ち勝を取り難し。而れば貴ぶ所に非ざるなり」と。監使馳せ諸軍に告ぐ。皆感激す。駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記○駿府記曰、松平忠雄・

蜂須賀至鎮謁見。神祖命之築垣列竹牌以防死傷。蓋既命両将又使監使告諸軍也。今従徳川記・難波戦記・松栄紀事　大将軍、土井利勝を以て使と為し神祖に言はしめて曰はく「聞くに、秀頼講和の議有りと。今、日本諸軍来集し此に在り。其れ一城を抜くこと何ぞ難きこと之れ有らん。講和既に成らば則ち復び攻むるを得ず。請ふ、日を刻み斎攻せん」と。神祖曰はく「大樹の憤激固より当(とう)たり。然れども小敵と雖へども亦侮るべからず。且吾、良将は戦はずして勝つと聞く。請ふ、大樹、枉(ま)げ我言に従へ」と。利勝岡山に帰り之を報ず。大将軍曰はく「大御所文武兼備、天下無双。然れども何たる重慎(ちょうしん)（注意深くする）にて此に至る」と。頗る悦ばず。本多正信側に在りて曰はく「誠に諭す所の如し。然れども大御所の謀慮深遠たり。願はくは初め之に従へ」と。駿府記・松栄紀事　城将織田雲生寺、豊志谷口を守る。

是日、部兵の二上外記・植原八蔵の奴隷忿闘す。諸書埴原作植原。今従佐々宗淳訂正　儕輩(せいはい)互いに之を助け数士人に及ぶ。死傷するもの七八人。陣営大いに騒擾す。雲生寺出

でて之を禁ず。藤堂高虎の前鋒藤堂良勝・藤堂高則以下其の騒擾に乗り兵を率ゐ急攻す。雲生寺及び早川九郎左衛門・長曾我部盛親等拒戦す。良勝・高則等進み之を破らんと欲す。雲生寺、士卒を指揮し頻りに鳥銃を発す。高虎の部将渡邊了鉛に中り被傷す。其余競進衝突す。雲生寺兵を援く。秀頼、山川賢信・北川宣勝等をして之を救はしむ。高虎、新兵の来救を見、抜くべからざるを知り自ら海螺を吹き兵を収む。士卒命に従ふこと臂指を使ふが如し。時の人之を称む。　難波戦記

六日、神祖行営を茶磨山に移す。大将軍岡山より来謁す。　年譜・創業記・駿府記・家忠日記・徳川記・難波戦記　神祖白金一千枚を住吉社に献ず。小堀遠江守政一　新助政次子。剃髪号宗甫以嗜茶名于世　・別所孫二郎をして諸軍に住吉を侵掠するを禁ぜしむ。　難波戦記

是日、□（兜）山麓に亀有り。無万数。南北に相分かれ闘ふ。北方の亀負く。或は死し或は傷して退く。　駿府記・難波戦記・松栄紀事　神祖之を聞き、近臣に語りて曰はく「亀の闘ひ所在に（どこでも）之あり。吾昔岡崎に在り。数（しばしば）之を見る。怪に非ざるなり。

然れども亀は冬蟄（こも）り春出づ。今隆冬祁寒（厳寒）に亀出で手足凍らず健闘夏の如し。此れ怪しむべきなり」と。時の人皆大阪兵敗亡の兆と謂ふ。　難波戦記・松栄紀事　是に先んじ、伊奈忠政、福島正勝・毛利秀就の役夫を督し堤を築く。淀川に在る所の吉田了以の船数百艘を以て土石を運び上流を塞ぐ。竹木を編み以て堰と為す。九日、堤成る。堤高一丈八尺、広十五間。長等川北に折れて流る。堤より城下に至り水落ち陸と為る。大路然の如し。監使山城宮内少輔・瀧川正弘来たり言ひて曰はく「河水皆尼崎に流入す。一二日を過ぎず天満の河水悉く涸る」と。神祖悦ぶ。城兵皆胆を喪ひ、相謂ひて曰はく「中島・淀川の下流水得べからずして涸る。何ぞ其れ神なる」と。　徳川記係六日。今従創業記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事　是夜より諸軍毎夜鳥銃・仏郎機（ふらんき）を発し大喊すること二三次。　年譜・駿府記・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記○創業記曰、酉亥寅毎夜三時発喊敵銃。松栄紀事曰、城兵不得休息皆大困。按ずるに、青山石見守、城中に通謀す。其実は困ぜず。下文に詳し

十日、織田有楽・大野治長、村田吉蔵・米村権右衛門を以て使と為し本多正純の営に来。和議を修す。後藤光次、介を為す。　拠冬夏事記。十一月二十四日。有楽・修理、以吉蔵・権右衛門為使。本多上野介伝命。使修和議。是日又来。非始于此也　神祖、二使を召して曰はく「秀頼、客兵を招集すること甚だ謂無きなり。然れども和議成らば則ち吾当に客兵を殺さず以て其生を全うせしむべし。秀頼城を出で大和守に移居せんか、然らずは総濠を填(う)めんか、二者一に居(お)く。宜しく安平の策を思ふべし」と。使者城中に還るも議決せず。然れば将士之を聞き鋭気頗る撓(たわ)む。神祖、監使をして諸軍に令せしめて曰はく「城兵降らんと欲する者之を許す。宜しく箭書を射、之を知らすべし。降者其の姓名を報せよ」と。　徳川記・慶元記・難波戦記・年譜附尾

是日、京師の市人鉛一千斤を献ず。　年譜・徳川記・難波戦記

是夜、我軍発喊放銃すること前夜の如し。城兵少しも沮(くじ)けず投炬発銃す。明夜に至るも亦然り。　創業記・徳川記・難波戦記

十一日、井伊直孝、天王寺口を攻め土山に起つ。仏郎機（ふらんき）を発し以て楼櫓を撃砕す。越前・加賀の諸軍も亦此の如し。　松栄紀事本書不日。係藤堂高虎鑿地遂（道）土（上）。今拠之　神祖、間宮権左衛門・島田清左衛門直時に令し開鉱夫（石掘工人カ）をして地道を鑿（うが）たしむ。藤堂高虎・井伊直孝・松平利光、攻むる所に鑿つべきの地有り。直孝、工をして之を鑿たしむ。城兵之を知る。亦地道を鑿たんとするも之を拒ぐ。直孝命ずる所の土地軽鬆（けいしょう）たり（ゆるく洲になっている）て終に成すを得ず。　松栄紀事曰、高虎使鑿地道、濶（広）二間、深一間、立方一尺許。以五寸板為蓋通道、至楼櫓下。直孝及越前之兵、亦樹柵濠上。使開鉱夫鑿地道以達櫓下。今従徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記　島津家久、兵を提げ薩摩を出づと雖へども行程僅か二日なるに風を待つと託言し海上に泊し進まず。神祖予め細川忠興・田中忠政・加藤忠廣に命じて曰はく「島津発せずんば則ち疆囲を離るる勿かれ」と。故に三将軍期に会せず。　創業記・細川家伝録

十二日、神祖・大将軍、天満を按行す。大将軍、有馬豊氏の陣営の井楼に登り城

中を望見す。城兵銃を発すること麻の如し。大将軍井楼を下らず。水野勝成来たり言ひて曰はく「候騎の者は一処に。大将は按行し各処を視る。須らく志貴野に至るべし」と。神祖・大将軍之に従ふ。上杉景勝の営前を過ぐ。直江兼續先づ銃手をして大銃を連放せしむ。城兵頗る傷す。神祖之を喜びて曰はく「大将軍行かば先づ銃矢を発す。此れ軍法なり」と。　年譜・創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記。勝成・兼續事拠冬夏事記

十三日、神祖梓人中井伊（ママ）正次に命じ長梯を〔造り〕攻具を設けしむ。　駿府記曰、毎大将一人給梯立十張　浅野長晟・松平忠義をして濠上に桴（いかだ）し土猪（堵）を以て濠を塡（う）めしむ。　徳川記・慶元記・難波戦記

十四日、阿茶局、京師より還る。使として京極忠高の母常高院、城に入り和議を修するなり。　常高院信常高誤（ママ）。按ずるに、浅井備前守長政の三女、長は大虞院、次いで常高院京極高次夫人、次いで崇源院大夫人なり　九鬼守隆、盲船を新造す。其状常に異なり前（すす）むに可（よ）く郤（却

＝しりぞく）くに可し。撃刺に於て敵をして傷する能はざらしむ。守隆の父嘉隆、朝鮮の役に屢舟師を以て明兵と戦ふ。故に部下の士に至るまで皆水戦を善くす。

是日、守隆、盲船を泛べ難波橋に入り銃を城中に放つ。向井忠勝・千賀與八郎・小濱民部少輔等も亦同じく船を進む。　難波戦記

十五日、神祖、後藤光次を召し和議の事を問ふ。光次対へて曰はく「前に諭す所の如く、淀殿質として城を出づるか、然らずんば則ち塁を毀ち濠を塡め客兵を放出せよと。城将、秀頼の意を伝へ以て為すに、淀殿を質と為す、須らく其請に従ふべし。但し客兵に割与するの地無し。采地を給ふを請ふと。台命（主君の命令）以て為すに、客兵何の功有りて采地を給はんやと。即ち此言を以て城将を諭すも未だ其報（返事）有らず。蓋し和議を緩にし以て吾士卒を疲れしむるならん。楼堞を修し以て守禦を固むるか」と。或は伝ふ、日者（日の吉凶を占う人）之を筮ふに、明年乙卯、秀頼吉年なり。故に其事を遅緩するやと。人皆之を疑ふ。　駿府記・徳川記・難波戦記

是夕、大坂城中又村田吉蔵・米村権右衛門を遣はし言ひて曰はく「淀殿当に質として東国に之くべし。然らば則ち皆誓書を送り以て他無きを明らかにせよ。客兵宜しく采地を給ふべし」と。神祖怒りて曰はく「嶋(さき)に言へり。客兵何の功有りて采地を給ふかと。使者再来せば其頸を刎(は)ぬべし」と。即ち之を却く。 徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記

十六日、城将大野治房の部将塙直次・長岡監物貞安 城所友仙曰、旧米田氏後更今氏 ・御宿政友等相議る。城久しく囲まる。座して屈を受くるは非計なり。其営を夜襲するに如かず。蜂須賀阿波守、本町橋の南に陣し松平宮内少輔、橋北に陣す。宜しく此二営を襲ふべしと。治房曰はく「凡そ夜戦は寡兵要を為す。寡兵にて二営を撃つは必ず志を得難し。宜しく阿波の営を却け以て傷の怨みを報(かえ)すべし」と。乃ち鋭兵一百二十人を選び 徳川記・慶元記作五十人。冬夏事記八十余人。松栄 紀事一百人。今従大阪軍記・難波戦記 軍号(軍中での暗号)を定む。四更(真夜中)兵を潜め橋を渡り蜂須賀至鎮の営を襲

ふ。急ぎ発喊し〔諸〕営騒擾す。至鎮の営警備懈（おこた）らず。暗夜接戦す。城兵衝突すること良久（やや）し。引き去らんと欲す。徳川記・慶元記・冬夏事記並曰、至鎮之卒連夜焼炬、警備困倦。眠于竹牌之後。兵士若（苦）寒入土庫焼薪暖身。城兵突入乱斫。今従難波戦記・大阪軍記・松栄紀事 至鎮の前軍隊将中村右近眉尖刀を揮ひ之を追撃す。城兵還り闘ふ。右近戦死す。七條與三右衛門、城兵上條又八と戦ひ戦死す。稲田修理示植、敵三人を斬り創せらる。巌田七左衛門と敵を追ひ橋に迫る。城兵木村彦左衛門・牧牛抱 難波戦記作牧野右馬助曰。後称牛抱 左近。一本難波戦記、午抱作牛尾曰。大阪軍記作牧牛抱。命従之。蓋初称牛抱。而後更為氏也 ・畑角大夫・田谷右馬助拒戦す。示植の子九郎兵衛植次時に十五歳。駿府記作十四歳。松栄紀事十六歳。今従徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記 城兵と戦ひ其級を獲る。中村右近の首敵の獲る所と為らざるは示植父子の力なり。鵜飼七郎左衛門・四宮與兵衛・植井十兵衛、敵六人を斬る。凡そ十余級を獲る。至鎮の兵死者二十三人。松栄紀事作三十余人。今従徳川記・難波戦記・冬夏事記 大野治房・御宿政友兵を橋上に列し以て城兵の来帰者を迎ふ。松栄

紀事曰、敵兵逃入城門自焼橋。故至鎮之兵引退。楼（拠）難波戦記・慶元記・冬夏事記等書。其説非也。故不取

塙直次濠上に在り城兵を指揮す。長岡貞安濠外に出で指揮す。直次、牌を濠上に立てて曰はく「夜大将塙團右衛門直次を討つ」と。故に世人唯だ直次、隊将たるを知るのみにて復た貞安も亦隊上(主)たるを知らざるなり。

十七日、至鎮、行営に告状す。神祖・大将軍、至鎮の功を褒め書を逢庵に賜ひ之を労(ねぎら)ふ。

年譜・創業期・駿府記・家忠日記・徳川記・慶元記・冬夏事記・松栄紀事○難波戦記・大阪事記並曰、城兵亦有称巖田七左衛門者、披猩々氅後衆而退。至鎮之兵欲追撃之。彼呼曰、我巖田七左衛門也、不可傷。至鎮之兵七左衛門亦著猩々氅。故記（謂）之儕輩。縦之見其入城始覚為敵。悔不殺之。和議或（成）後、至鎮部将報城将称七左衛門殿而有勇。冬夏事記曰、監使小栗又一本（来）視戦場。使至鎮之兵撤営前之称（柵）。衆皆訝之。然不能違監使之命、撤之。是日、神祖按行戦場大褒之曰、阿波守年尚少壮、而長於戎事如此。其蒙称賞又一之力也。衆服其言。

按ずるに、小栗重常、柵木を抜かしむれば則ち之有るを宮（容）す。然るに諸書載せず。十七日、神祖戦場を按行す。故に併せ此に附す

是日、勅使権大納言藤原兼勝・藤原實條、行営に東(来)、密詔を伝へて曰はく「天寒く年老戎間に労するに宜しからず。須らく軍事を諸将に命じ暫く京師に帰り以て休息すべし。秀頼講和せんと欲せば則ち宜しく勅を下し之を修むべし」と。神祖、拝謝して曰はく「臣諸軍を指揮する為に戦場に在り。老いたりと雖へども労と為さず。和議宸衷を労すべからず。若し秀頼詔を奉(う)けずは則ち是れ朝廷を軽蔑するなり」と。　駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事

十八日、大将軍陣営を巡行し志貴野に至る。安藤重信を召して曰はく「今須らく大和川を渉り今福に至るべし」と。重信之を□(ため)(女篇に慮)ふ。然れども違命する能はず。本多正重岡山の行営より来たるに会ふ。重信之に謂ひて曰はく「子(し)の意何如」と。因りて天を仰ぎ日蚤(つと)に暮るるを視る。正重も亦仰ぎ視て曰はく「日已に昃(かたむ)く。行営路遠し。川を渉らば則ち暮れに抵る。方に帰るを得」と。重信、大将軍に言ひて曰はく「三彌の言是(ぜ)なり。須らく明日にすべし」と。大将軍之に従ひ岡山に

還る。時に日未(ひつじ)を加ふ。其今福に至るも猶ほ未だ晩からざるなり。然れども志貴野・今福、敵出兵し易し。故に二人然り云ふ。時の人之を称む。難波戦記 神祖、田村兵庫をして備前島片桐且元の営より仏郎機(ふらんき)を発せしむ。毎月十八日、秀頼豊国原廟に詣づ。故に是日に用ゐる。会(たまたま)大虞院城外の兵を観んと欲し殿守に登る。炮発声し雷霆の如し。鉛(たま)殿守第二層の柱に中(あ)たり之を撃磔(たく)す。侍女二人忽ち齏粉(せい)と成る。 徳川記・慶元記・難波戦記、皆係十七日曰、召牧野清兵衛・稲冨宮内及梓人中井大和守還銃手数十人以大銃撃破楼櫓。三人和（相）議。片桐且元之営最近于城故定其方位。量淀殿居発大銃数百口撃砕一櫓。殺侍女七八人。但徳川記・慶元記、作管沼定芳之営。按ずるに、松栄紀事十八日に係く。叙事頗る実を得たり。故に今之に従ふ 婦女皆肌粟(きぞく)悲泣す。大虞院大いに驚き亟やかに秀頼をして講和せしむ。秀頼聴かず。難波戦記曰、会二位局伴阿茶局未于城中修和議。按ずるに、諸書、阿茶局城に入るを載せず。蓋し此の前に在るなり。戦記又曰、淀殿卒侍女巡行城中視其軍装。郡主馬、建秀禎（頼）旌旗十二。津川左近列茜吹貫五十本立金瓢箪馬標。甲士六七万陣列城中。弓手銃手皆在楼櫓厳備勢甚勇壮。淀殿大喜謂、可以制勝。既而登殿守望見我軍。歩騎数十万。

不遺尺地、旌旗蔽空。剣戟耀日。淀殿見之気悸。召大野治長曰、敵兵幾及百万。城守不可恃。一旦城陥則有誰擁護右齋（府）乎。宜修和議。治長啓秀頼。秀頼笑曰、婦人之情同宣如此。敵若合囲斎攻則我亦当出郭門決戦。凡軍之勝敗不在兵之多寡。而在衆之和与不和。宜以此告諸軍。治長召諸将諭之。将士皆感激思奮。本書不係日。不知其在何時。

按ずるに、淀殿屢殿守に登るべからず。蓋し是日の事にして二事に非ず。諭告の言恐らくは後の縁飾の綺。故に取らず

織田有楽・大野治長及び七隊長皆之を諫む。秀頼曰はく「我今挙兵するは忠を得んと欲するに非ず。特だ先人の遺命に従ひ此城を以て墳墓と為さんと欲するのみ。卿等何の見る所有りて我を諫むるや」と。有楽・治長密かに相議りて曰はく「新進輩をして上諫せしめば則ち事或は成るべし」と。乃ち眞田信仍・長曾我部盛親・後藤年房・明石守重を秀頼の前に召す。治長問ひて曰はく「今関東和議を修めんと欲す。其の得失何如」と。年房対へて曰はく「鄙に大事を挙げ僉謂ふ、太閤恩顧の士当に来帰すべしと。而るに或は使者を禽り竟に一人として帰順する者無し。凡そ糧食・火薬時有りて尽く。敵数十万人合囲し路に邀つ。糧を徴せん

と欲すと雖へども何に由りて得ん。孤城を座守するも又後援無し。和を許すに如かず」と。眞田信仍曰はく「凡そ城守は衆心皆一に併力堅拒すと雖へども後援無くんば則ち終に守るべからず。頃（このごろ）南北の守禦を見るに敵急に来攻せば則ち城兵色を失ひ先づ走路を覓（もと）む。前日藤堂和泉守、豊忠谷口を攻め柵を破り壁を攀る。勢幾んど危急たり。児女に至るまで瓦礫を擲（な）げ火薬を装し以て之を防ぐ。而るに大将雲生寺病と称し出でず。娼妓を集め以て頭風に託す。大将既に此の如し。況んや士卒をや。此の如きの輩、之を敵と謂ふか我と謂ふか。城守成るべからず。和議拒むべからず。又兵衛の議是なり」と。有楽・治長素（もと）和議を好む。大虞院に一（ママ）人の言を以て告ぐ。大虞院、又有楽・治長をして秀頼を諫めしむ。

松栄紀事曰、有楽・修理召諸将議之。新進将士皆曰、城守二三年待其変有則可以得忠。何用和議之為、与之相反。今従徳川記・慶元記・難波戦記

秀頼怒りて悲泣して曰はく「曋（さき）に片桐市正、我を諫むるに正に卿等（ら）の言の如し。当に其時卿等〔市〕正の言を以て非と為す。而して市正の忠言是に至り方に

験(あきら)かなり。此吾命の窮するなり。然れども宿将・新進皆為に生を媮み和議を好む。吾常(当)に和親し以て士卒の命を全うすべし」と。有楽・治長忸怩〔無〕言と雖へども和議を喜び将に成さんとするなり。　難波戦記

是日、常高院、京極忠高の営に来。　年譜・創業記・駿府記・家忠日記・難波戦記　神祖、阿茶局・本多正純をして之に往き会せしむ。常高院、大虞院の意を以て二人に謂ひて曰はく「右府の命を全うせば則ち当に和親すべし」と。神祖、阿茶局をして之に諭さしめて曰はく「我素秀頼を猶子と視る。徒らに姦人の誤る所と為るを以て（悪者にはかられたため）我を祝(視)ること仇の如し。故に已むを得ず干戈を尋ぬ（武力にうったえる）。故太閤嘗て秀頼を以て我に属(嘱)さしむ。且大樹と翁壻の親(しん)有り。今兵を休め好を結ばば則ち我も亦善く之を遇すべし」と。常高院帰り報ず。大虞院大いに喜びて曰はく「唯だ大御所の命のみ是れ従ふ」と。　徳川記・慶元記・難波戦記、唯曰、常高院謂阿茶局・本多正純曰、不過一二日、当伝城中之報。松栄紀事叙事頗詳。今従之　大将軍行営に来謁し神祖に謂ひ

て曰はく「諸軍に下令し合囲攻城せば則ち一挙にして抜くべし」と。神祖曰はく「城固より抜くべし。然れども吾兵も亦当に多く損ずべし。往年本願寺門主顕如、此城を守り、織田信長、数万の兵を以て之を攻む。三年終に抜く能はず。其後太閤築修し〔　〕今城兵も亦多し。輒ち陥すべからず。兵法敵に因り輔（転カ）化す。良時（ママ）謀を好みて成す。方略我に在り。将軍、宜しく勢以て之を待つべし」と。本多正信に命じ益（ますます）和議を修めしむ。大将軍命を奉け岡山の営に還り、本多忠政をして陣を天満に移さしむ。土山を起こし攻具を督す。大虞院和議成るを欲し頻りに秀頼を諭す。秀頼已むを得ず之に従ふ。　難波戦記

十九日、常高院又京極忠高の営に来。神祖、阿茶局をして之に従ひ入城せしめ、大虞院を諭して曰はく「秀鎮（頼）猶ほ大阪に居（きょ）せんと欲せば則ち当に旧封の地を授くべし。若し避け他邦に之（ゆ）くを欲せば当に大国を以て封ずべし。波（彼）召集する所の客兵、我之を禁ぜず。去留は其意に任す」と。大虞院諾す。常高院・阿茶局其の約（やく）を

固めんと大虞院に謂ひて曰はく「今求むる所有らば則ち伝命すべし」と。大虞院、又有楽・治長及び七隊長を召し之を議る。皆曰はく「右府公大阪に在ること故の如く、群臣の采邑は旧に仍る。客兵を禁ぜずは則ち和親便(びん)たり」と。二人、帰報す。神祖、之を聞きて曰はく「請ふ所皆当に之を許すべし。今既に和親し永に干戈を弭(や)めば則ち当に我が士卒をして彼の総濠を填(う)め楼櫓を毀ち要害を撤せしめ以て衆人の疑を釈(と)くべし」と。冬夏事記・松栄紀事 常高院入城し之を報ず。大虞院和議成るを喜び復び再思を加へず。皆其の言ふ所の如し。秀頼絢(やく)して曰はく「濠を填め石壁を壊し以て平地と為すは則ち当に命の如くすべし。淀殿質と為り関東に往くは則ち能はざるなり。当に有楽・修理の子を以て質と為すべし。浪花戦記曰、淀殿務欲和成、而将赴関東為質。而秀頼不聴。故織田有楽・大野道見相議、約填濠停淀殿為質及遂客兵。詳（許）以二人子為質。按ずるに、諸書皆云はく有楽・修理、子を出だし質と為すと。而るに道見、質を出だすを書かず。故に取らず。新旧の群臣各其所を安んじ我を遇すること曩時(のう)（さきの時）に異ならず。請ふ誓

書を送れ」と。神祖・大将軍、之を許す。是に於いて和成る。年譜・創業記・駿府記・家忠日記・難波戦記○創業記曰、本丸・二丸如旧。毀三丸。慶元記曰、毀二丸・三丸。家忠日記・徳川記曰、本丸如旧。填二丸・三丸之濠。諸書不同。難波戦記・松栄紀事但云、填総濠毀塁壁。今従之。又按ずるに、創業記曰はく城中糧食充羨（あまる）、其余一として匱乏する物無し。唯だ火薬のみ乏しかるべし。凡そ城兵皆大銃を用ゐ小銃を用ゐず。兵起き此に至り火薬八百石を用ゐる。故に時の人然り云ふ

神祖、蜂須賀至鎮を行営に召して曰はく「聞くに、卿、児有り。千松と曰ひ後名忠英。叙阿波守四位下任侍従 漸く孩を免ると。須らく我を以て准父と為すべし」と。乃ち帯を解き之を賜ふ。至鎮拝謝して退く。神祖使を遣はし衣服一襲・黄金三百枚を千松に賜ふ。至鎮之を阿波に送り千松をして之を拝戴せしむ。家忠日記

二十日、秀頼、二位局・饗場局をして常高院に従ひ行営に来たらしめ衣服三領・緞子三十端を献ず。冬夏事記。為淀殿所献。拠難波戦記、淀殿献物、見下文。今従家忠日記・慶元記・難波戦記

是日、神祖、本多正純の〔臣〕寺田将監をして後藤光次を副とし城に入り質を受けしむ。織田有楽、其子武蔵守尚長（有楽第五子）を出だし、大野治長〔幼〕子を出だす。光次怒りて受けずして曰はく「幼息何ぞ質と為すに足らん。宜しく長子を出だすべし」と。治長乃ち長子治徳を質と為す。（時尚長十九歳。治徳十七歳）神祖聞きて之を韙（よし）とし、本多正純をして二質子を拘（とら）へしむ。（年譜・創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記。光次争質拠駿府記・松栄紀事）

二十一日、安藤直次・成瀬正成・永井直勝をして諸軍に命じ攻具を撤し兵を引き各本営に帰せしむ。松平忠明・本多忠政・本多康重、濠を填するを監る。瀧川正弘・山城宮内少輔・佐久間政實・山本新五左衛門、城門を監、士卒の闌（らん）入を禁ず。是日、鎮西の舟師、室・兵庫の津に来泊す。薩摩の兵船七百余艘、豊後・豊前・肥後・筑後の兵船合三千余艘。（難波戦記作一千余艘。未知孰是。今従徳川記・慶元記・冬夏事記）神祖、本多正純をして之を労はしめて曰はく「遠来風波に辛勤す。然れども和親既

に成る。宜しく各其国に帰り以て士馬を憩ふべし」と。（徳川記・慶元記・難波戦記）監使山田重利・渡邉半四郎・青山石見守（即祖父江法齊見　五年六月）松平忠明・本多忠政等を副とし濠を填するの役を監る。三人城に入るに婦人有り。石見守の姓名を呼ぶ。石見守面赤を発し已むを得ず諾す。婦人、之に謂ひて曰はく「右府公母子恙（つつが）無し。今和議成る。想ふに召（君）〔亦〕喜ぶべし」と。重利・半四郎行営に帰り密かに具（其）事を上る。神祖、石見守の貳心有るを覚り、之を殺す。鄙に我軍城を囲み、夜数（しばしば）発喊す。城兵肯へて驚騒せず。亦発喊し炬を擲ぐ。皆石見守密かに城中に報せ之をして備を為さしむる所なり。是に至り其姦始めて露はる。（難波戦記）

二十二日、神祖、板倉重昌を城中に遣はし、大将軍、阿部正次を遣はし秀頼の誓書に瀝血するを監しむ。（大阪記、板倉重昌作本多正純誤。今従下諸書。按ずるに、諸書大将軍の使を載せず。今創業記に拠る）大野治長、重昌に問ひて曰はく「誓書は当に大御所に呈すべきか、幕下に呈すべきか」と。重昌初め旨を取らず。擬議（ぎぎ）（論議）する所無く直ちに云はく

「大御所に呈す」と。重昌誓書を受けて帰る。神祖望見し之に謂ひて曰はく「曩に汝を以て使と為し誓書を誰に呈するかを命ぜず。事何如（いかん）（どうだ）」と。重昌具に其状を白（もう）す。神祖喜びて曰はく「汝に非ずは之を弁ずる能はず」と。

是日、秀頼、木村重成・郡良列を行営に遣はし、神祖の誓書を乞ふ。瀝血摸糊たり。重成曰はく「婦人愚魯（＝陋）。恐らくは淀殿之を怪しむ。願はくは鮮血を瀝せよ」と。竟に其請の如くす。其後、神祖、重成の楽（ママ）略有るを称む。

年譜・創業記・家忠日記○難波戦記曰、神祖鍼指血不出。神祖曰、年老血虚不能後湿。重成不聞。竟見瀝血而還。今従徳川記・慶元記。又按ずるに、諸書皆神祖の誓書を以て前と為し、秀頼の誓〔書〕を以て後と〔為す〕。冬夏事記。唯神祖の誓書を取るを載せ、秀頼の事を載せず。松栄紀事作先取秀頼誓書。後受神祖誓書。拠浪花戦記、重昌・正次、与重成同〔時〕入玉造口。同（固）無前後也。然今従松栄紀事

二十三日、松平忠明・本多忠政・本多康紀・瀧川正弘・佐久間政實・山城宮内少輔・山本新五左衛門等役夫を督し四門を監し以て濠塹を填む。大野治長出で督使

に謂ひて曰はく「初め約に、総濠を填むるは是れ西南外郭の濠なり。今、内城に入り妄りに濠塹を填め以て平地と為すは何ぞや」と。督使応へて曰はく「両公総濠を填むを命ず。吾輩以為へらく、凡そ有る所の濠塹之れ総てを謂ふと。初め其内外を分かつを聞かざるなり」と。日東西諸侯の数万の歩卒を投じ材木を搬び土嚢を運び以て之を填む。治長禁ずる能はず。神祖数使を遣はし之を促す。濠塹広大にして亟やかに弁ずる能はず。神祖頗る悦ばず。秋元但馬守泰朝北條家士越中某子其の所に馳せ至り濠の中間に当て築堤し道路と為す。濶さ二歩、以て騎を通ずべし。輒ち行営に帰り成るを告ぐ。神祖悦ぶ。間一日、神祖京師に入るに即ち此の路に由る。時の人※朝の敏捷を称む。

松栄紀事曰、本多正純・成瀬正成・安藤直次投歩卒填濠。自外郭至三丸。大野治長出詰之。正純・正成・直次対曰、総濠者凡有濠塹処、皆可填也。子欲今（全）二三丸之濠塹。豈欲復城守乎。治長無語而罷。正純等〔　〕督役夫進（唯）留本丸濠塹其余皆填之。一（日）成。按ずるに、松平忠明・本多忠政等に命じ濠を填むるは（上文に）在り。正純・正成等の監役、下文、神祖京に入る（之）後に在り。

且濠塹深広、何ぞ一日にして成るを得ん。今従徳川記・慶元記・大阪事記・難波戦記。秋元※朝事拠難波戦記

二十四日、織田有楽・大野治長行営に来謁し、各衣服三領を献ず　家忠日記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事　大虞院、大隅與左衛門をして臥具を献ぜしむ。　難波戦記。拠明年五月大阪城火。與五衛門厨人長也　藤堂高虎・本多正信介（かい）を為す。越前少将忠直・其弟忠昌・松平利光・松平利隆・忠継・忠雄以下列侯皆行営に謁し和成るを賀す。初め有楽・治長城を出づるに相約す。将士約に倍（そむ）き総濠を填むと訴ふ。是に至り神祖の成すを長とし敢へて発語せず。

是日、蜂須賀至鎮に書を賜ひ前後の軍功を賞す。稲田宗心　修理示植父、称大炊　・林道感に黄金一百両を賜ふ。二人年八十余。曋（さき）に城兵至鎮の営を夜襲するに二人軍を指揮す。事能く機要に適ふ。故に之を賞す。稲田示植に書及び元重刀を、其子植次に書及び兼光刀を、山田織部・樋口内蔵助・森甚五兵衛・森甚大夫・巌田七左衛門に書及び衣服を、松平忠雄の兵横川次大夫・箕浦玄蕃に書を、佐竹義宣の臣

梅津憲忠に書及び信國刀を、戸村義国・大塚資卿・黒澤道家・秋田兵庫・上杉景勝の臣隅田大炊・水原親憲・鐵孫左衛門・島津玄蕃に書を賜ふ。皆其戦功を賞す。

松栄紀事係十七日。今従家忠日記・德川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記　長崎奉行長谷川藤廣を召し略(畧)津政所と為す。　駿府記・家忠日記・德川記・冬夏事記

是夜、茶磨山の近習の営五六失火す。松平正綱・板倉重昌・加賀爪忠澄、営門を固守し警備厳重たり。　駿府記・德川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事　是に先んじ、大阪城兵、日に兵糧を尼崎に徴す。建部政長肯(あ)へて出ださず。城兵、尼崎側近の民夫を補(捕)へ質と為し之を督責す。出兵し尼崎を窺(のぞ)ひ窺く。政長列柵固守し、城兵近づくを得ず。将に引き退かんとす。政長及び池田越前、之を追撃せんと欲す。南部越後之を正(止)めて曰はく「大軍は追ふべからず」と。是に至り和成る。神祖、松平忠利をして天満より移し尼崎を鎮めしむ。忠利防禦厳粛たり。政長行営に来、神祖・大将軍に謁す。城将薄田兼相、兵三百を帥ゐ神崎に至る。使を尼崎に遣は

し政長を責めて曰はく「尼崎は大阪（豊臣方）管内、宜しく租税を納むべし」と。政長之を忠利に告ぐ。忠利使を神崎に遣はして曰はく「聞くに、子（し）、〔　〕の命と称し租税を建部三十郎より徴すと。松平主殿頭尼崎に在り、能く此に来んや。然からずは宜しく亟やかに引き去るべし」と。兼相対ふる能はず兵を引き城に還る。神祖聞きて之を善しとす。　鵞峯文集・深〔溝カ〕本光寺碑・松栄紀事　松平政宗・藤堂高虎以下の諸将密かに本多正純に就き上言して曰はく「今大阪との和親恐らくは可（よ）からず。秀頼終に保つべからず。後に必ず患有り。今に及び之を除くに如かず」と。神祖曰はく「諸将の言ふ所是（ぜ）に似て非なり。凡そ不義を行ふ者必ず天譴を蒙る。近世の織田信長・武田信玄の如きは是れなり。往年長湫の役に余大義に伏（仗よ）り織田信雄を援け一戦して勝つ。太閤終に敵する能はずして和親を乞ふ。故に大阪に至り太閤に謁見す。其後毎（つね）に太閤の軍に従ひ鎮西・関東に竭力行間（こうかん）（在陣）す。其の、太閤に功有るは皆諸将の知る所なり。曏（さき）に石田三成、幼弱の秀頼を欺罔（ぎもう）し（たぶらかす）

兵を挙げ余を伐つ。関原の戦に兇徒殄滅(てんめつ)す。当に此の時、諸将皆余に秀頼を殺すを勧む。余、太閤の好(よしみ)を思ひ以て其生を全うせしむ。余、太閤諸将の等夷（仲間）に非ず。苟(いやしく)も義を以て合ふ者なり。秀頼恩を以て仇を為す。戎を興し難を構へ以て天下を毒す。今之を取る（討取る）は難からず。然れども、人、不義を行ふも、余、善を以て之に報いんと欲す。故に和親す。今よりして後秀頼恩を忘れ又不義を行はば則ち速やかに亡ぶなり。請ふ、諸将、復び言ふ勿かれ」と。諸将皆其言に服す。　難波戦記

〔二〕十五日、前夜、神祖茶磨山の行営を発し明くる比(ころ)京師に入る。板倉勝重出で迎へ之を賀す。　冬夏事記曰、後藤又兵衛・眞田左衛門佐相議欲夜襲茶磨山行営。其日、神祖発行営故不能及。諸書所不載。附以備考　大将軍、岡山に在り。尾張宰相義直・遠江宰相頼宣、天王寺営に在り。本多正純・成瀬正成・安藤直次、茶磨山行営を守り、濠塹を填むるを監る。織田有楽　慶元記作雲生寺。今従下諸書　・大野治長・伊東長次・青木一重・堀田正高・速見(水)

守久、岡山に来、大将軍に謁見す。

二十七日、大将軍、土井利勝を二條城に遣はし濠を填むる役を督するを告ぐ。神祖東西列侯を労ふ。皆藩に就き休息し徭役を免るること三年。大阪・界津其余処所に法全(令)を下す。駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事 是に先んじ、神祖上奏を経、秘府及び諸家の載籍を繕写す(写し直す)。公卿或は秘して出ださざる者有らば則ち之に謂はしめて曰はく「今之を惜しみ出ださずして他日其書を以て援拠と為さば則ち信ずるに足らざるなり」と。故に公卿皆所蔵の秘籍を出だす。是に至り謄写既に成る。僧崇傳・林道春、旧事記・古事記・續日本紀・文徳實録・江家〔次〕第・日次記・明月記・續本朝文粋・菅家文草・西害(宮)紀・釋日本紀・内裏式・山槐記・類聚三代格等の書を上る。其余猶ほ数十部有り。駿府記・冬夏事記・松栄記事

二十八日、神祖入朝し 年譜・創業記・家忠日記 白金一千枚・綿三百屯を後水尾天皇に、白金一百枚・綿一百屯を後陽成上皇に献ず。駿府記・松栄記事作献白金一百枚於天皇、五十枚於

上皇。今従徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記　中和門院及び女御之(これ)に准ず。　女御下（不）知為誰。此時東福門院尚幼、来（未）入内。蓋壬生院藤原継子・逢春門院藤原隆子。二人居其一未詳　神祖、公卿と禁廷礼儀法度を長橋局に議り二條城に還る。

是〔日、〕上皇、向(阿)野弾正大弼藤原實顯を以て使と為し　實顯四位季時子。後為権大納言　干戈已に戢(や)むを賀す。神祖入朝す。菊亭右大臣藤原晴季来謁して曰はく「将に明年の春を以て改元せんとす」と。神祖曰はく「漢唐治世の年号を選用するが可なり」と。　松栄記事曰、上皇勅問改年号。神祖奏曰云云。徳川記・慶元記・難波戦記並曰、板倉勝重白改元事。今従駿府記。按ずるに、明年元和に改元す。後漢の章帝・唐の憲宗の元和、皆治世の年号なり

二十九日、大納言藤原兼勝・藤原實條来。元会・白馬節会・蹋歌(とうか)・官位・准后・親〔王〕・位階を問ふ。凡そ七条。神祖曰はく「朝儀礼典は古今〔沿〕革多し。須らく駿府に帰り律令格式を考定し然る後に之を議るべし」と。　駿府記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄記事

是日、富田知治の旧封宇和島十万石の地を松平政宗の庶長子伊達兵五郎秀宗に賜ふ。 駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・松栄記事。秀宗叙従四位下任侍従遠江守 松平利隆の軍功を賞し白金三千枚を賜ふ。有馬直純に一万三千石を日向に増封す。酒井讃岐守忠勝に采邑三千石を下総の地に賜ふ。 家忠日記 是に先んじ、細川忠興固く大阪に赴くを請ふ。神祖之を許す。是に至り忠興歩騎九千六十余人を師ゐ乗船し門司に至る。和議既に成り、神祖班師するを聞きて帰藩す。 細川家傳録

是歳、平戸城主式部卿法印松浦鎮信卒す。六十六。子肥前守久信嗣ぐ。 家忠日記・寛永系図

元和元年乙卯正月朔、神祖二條城に在り。大将軍岡山の行営に在り。 創業記・元寛日録

二日、行営の兵寡きを以て松平忠明・本多忠政に命じ陣を岡山東に移す。 創業記

三日、神祖京師を発し駿府に還る。沿路放鷹す。

九日、岡崎に至る。　家忠日記作八日。今従創業記・駿府記　淹留す。

十日、以て濠を填むるの報を聞く。

是日、大将軍、安藤正次・佐久間政實を以て使と為し濠塹を填塞し其功将（まさ）に成らんとするを告ぐ。

十一日、大将軍、蜂須賀至鎮を行営に召す。書及び順慶の左文字刀を賜ひ松平氏を授け以て其軍功を賞す。稲田宗心・林道感に黄金一百両を、稲田示植に書及び長光刀を、其子植次に書及び延寿刀を、山田織部・樋口内蔵助・森甚五兵衛・森甚大夫・巌田七左衛門に書及び衣服を、佐竹義宣の臣梅津憲忠に書及び信國刀を、大塚資郷・黒澤道家に書及び衣服を賜ひ以て其戦功を賞す。　家忠日記・慶元記・難波戦記・松栄紀事

十六日、尾張宰相義直・遠江宰相頼宣、天王寺営より京師に入る。　創業記・駿府記

十七日、大将軍、上杉景勝の臣水原親憲・隅田大炊・鐵孫左衛門に書及び衣服を、

佐竹義宣の臣戸村義國に書文（及）び眞次刀を賜ひ、志貴野・今福の戦功を賞す。　家忠日記・松栄紀事

十九日、大将軍行営を発し伏見城に入る。本多正純・安藤重信を大阪に留め濠塹を填むるを監しむ。

是日、神祖岡崎を出で吉良に放鷹す。

二十四日、大将軍伏見より二條城に入る。

二十七日、入朝す。　年譜・創業記・駿府記　越前少将忠直・弟伊豫守忠昌従四位下に叙せられ侍従と為る。　家忠日記・雑録忠昌任官口宣　酒井萬千代忠行阿波守に任ぜられ、　雅楽頭忠世子　松平乗壽和泉守に任ぜらる。松平忠晴伊賀守に任ぜられ、秋田東太郎俊季伊豆守に任ぜらる。　城介實季子。後更河内守　太田新六郎資宗摂津守に任ぜられ、　新六郎重政子。後更備中守。致仕号道顯　並び従五位下に叙せらる。　家忠日記・松栄紀事

二十八日、大将軍京師を発し江府に凱旋す。　年譜・創業記・駿府記・家忠日記

晦、神祖中泉に至り留すること数日。

是日、大将軍、内藤右衛門を以て使と為し中泉に至り大阪濠塹の填塞功竣するを告ぐ。諸州侯伯をして皆藩に就かしむ。

二月朔、本多正純大阪より中泉に来、大阪羅城の楼櫓・石壁を毀つを白す。 駿府記・松栄紀事

四日、大将軍名護屋城に入る。是に先んじ、義直・頼宣、各其藩に帰り以て大将軍の駕到るを待つ。是に至り、大将軍、義直に長光刀・則國短刀を賜ふ。義直、長光太刀・来国𠀋短刀を献ず。 家忠日記

是日、池田輝政夫人良照院痘を患ひ卒す。 駿府記・家忠日記・松栄紀事

七日、大将軍中泉に至り神祖に謁す。本多正純父子座に侍す。酒井忠世・土井利勝・本多正重・安藤重信・水野忠元・井上正就・神尾守世・青山忠俊・小山長門守等七十余人謁見し、神祖之を労ふ。日午、大将軍中泉を発し懸川に至る。

十四日、神祖駿府城に還る。　年譜・創業記・駿府記・家忠日記

是日、大将軍江戸城に選(還)る。　松栄紀事

二十二日、岡山城主松平左衛門督忠継、痘を患ひ卒す。時に年十七。神祖甚だ之を悼惜す。　家忠日記作二十三日。今従駿府記・松栄紀事

是日、井伊直孝を駿府に召し命じて曰はく「汝の兄右近大夫廃疾し、直政の家を継ぐに堪へず。今汝を以て嗣と為す。宜しく軍務を掌るべし」と。直孝、弟、兄を越すを以て、其心安んぜず。安藤直次に就き固辞すること再三。允(ゆる)さず。直政の旧封上野安中の采邑三万石を割り直勝に賜ひ佐和山城を直孝に授く。食二十万石。以て其軍功を旌(あらわ)す。　家忠日記・松栄紀事

三月五日、前侍従伊賀守筒井定次及び其子順定、大阪に通款するを以て並び死を賜ふ。　和州諸将軍傳

十四日、加納城主奥平美作守信昌卒す。年六十一。　家忠日記

十五日、秀頼、青木一重を以て使と為し（難波戦記作伊東丹後守。挙一説曰、或云、青木民部少輔。与冬夏事記・松栄紀事合。今従之）大虞院、大蔵卿・二位局・正永尼をして常高院を従へ駿府に来たらしむ。台駕〔恙〕無く駿府に還るを賀して曰はく「去年の兵革に河摂二州の民悉く〔逃〕散す。田畝荒廃し以て大阪の士卒を養ふ無し。願はくは之を熟計せよ」と。神祖、大蔵卿・二位局・正永尼に謂ひて曰はく「尾州宰相の婚期近きに在り。余、尾州に往かんと欲す。三媼宜しく先に尾州に往き以て余を待つべし。且関東の婦女礼儀に閑（な）れず。媼等之を相（たす）けよ。或は余も亦尾州より京師に径ちに往かん。二州の民業を検察し以て政令を施す。民部少輔も亦当に尾州に往き以て命を待つべし」と。是に先んじ、大阪和親成り大虞院大いに喜ぶ。中（申）楽を設け舞曲を作し以て士女を娯ましむ。然れども将士の地を割与する無し。故に旧臣・客将皆喜ばず。秀頼に再び挙兵するを勧め大言して曰はく「去年東軍五十万環（かこ）みて之を攻む。克つ能はずして解き去る。東軍再び至るも何ぞ畏るること之れ有らん。

今塹塁無しと雖へども郊外に出兵し一戦して雌雄を決せば蔑(いや)しくも勝たざらんや」と。秀頼之に惑ふ。又兵士を召し募る。山林に潜蟄の士、京畿亡頼の徒、応募来隼(集)す。十五万人に幾(ちか)し。　松栄紀事○大阪記。挙城兵人数曰、眞田左衛門佐一万二千。毛利豊前守二万。長曾我部宮内少輔一万。後藤又兵衛一万。明石掃部一万。寄合組一万。木村長門守一万。大野修理一万五千。主馬一万。道目（見）一千。麾下及七隊二万三千五百騎。総十二万八千五百騎。去年城守七万五千。今増〔五万〕余兵。蓋松栄紀事挙其大報（数）也　神祖之を聞きて曰はく「〔弱〕兵麕集(きんしゅう)するは敗を取るの道なり」と。必ずしも之を禁ぜず。　徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事　織田雲生寺、大将として諸軍を総督するを請ふ。城将衆議一ならず。雲生寺慍(いか)りて曰はく、「吾信長の姪(おい)として諸軍を指麾すること何の不可なること有らん」と。終に城を出で京師に奔る。　冬夏事記　時に京師に流言す。大阪城兵将に街市を焼かんとすと。皆大いに恐る。醍醐・鞍馬・愛宕・高雄山の寺に奔(に)げ兵を群(辟さ)けんと欲す。或は曰はく「縦(たと)ひ大阪の兵京師を陥すとも敢へて禁闕（皇居）を犯せざるは必なり」と。市人争ひ資財

を禁廷・仙洞に搬び妻孥を公卿の第宅に託す。東西奔走、復た禁ずべからず。是に至り、神祖其騒擾を聞き井伊直孝・松平忠明・本多忠政をして京師を警衛せしむ。藤堂高虎、淀故城に拠り往来を按験す。松平定勝、伏見城を守る。　徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事○高虎行状曰、特（時）秀頼有火京師之謀。高虎急拠淀城。而使敵兵不能往来京師・大阪之間。内（由）是京師免税敵（祝融＝火の神）之災

是月、内藤信政をして尼崎城を守らしむ。三宅康信・其子康盛・仁賀保兵庫頭挙誠淀城を警衛す。　家忠日記・松栄紀事　安藤正次に采邑五百石を増す。　家忠日記・鵞峯文集・安藤正次

是春、民問（間）に蹋歌有り。其原（もと）伊勢より起き諸国に流行す。之を伊勢蹋歌と謂ふ。所在（ここかしこ）の群衆奔波讙噪（かんそう）日に甚しく遂に駿府に至る。神祖其の、民を惑はすを悪み彦坂光正に命じ之を禁ず。　徳川記・難波戦記・松栄紀事

四月四日、神祖駿府を発す。水戸少将頼□（房）、留守すること故の如し。　年譜・創業記・

家忠日記・徳川記・冬夏事記

五日、秀頼、大野治長・木村重成・渡邉尚以下諸将を率ゐる。七隊長及び眞田信仍・長曾我部盛親・毛利勝永・後藤年房等仙波より天王寺岡山に至り茶磨山に登る。旗数を樹(た)て軍容を整へ戦場の広狭険易を按視す。 大阪記係四月十八日。難波戦記五月朔。

松栄紀事五月五日。按ずるに、東軍の諸将既に畿内に迫る。秀頼五月に至り城を出で按行すべからず。今、冬夏事記に従ふ

九日、神祖名護屋に至り留すること四日。板倉勝重数大阪(しばしば)の反討益彰(ますますあきら)かなるを報ず。神祖下令し又大阪に征く。 年譜・創業記・駿府記・家忠日記・難波戦記

是夜、域将大野治長、軍事を議り畢(お)へ櫻門を過ぐ。俄かに賊在り、暗中に治長を刺し東に走る。治長之を追はんと欲するも傷せられ行く能はず。治長の従士追撃し賊を斬るも殊(た)たず。賊回走し本路を過ぐ。従士平山内記、治長を扶けて帰る。覿(てき)面に(ばったりと)賊に遇(あ)い立ちどころに之を斬る。治長之を撃役(殺)す。翌日、検屍す

るに、大野治房の所部成田勘兵衛の諜者なり。治房、勘兵衛を禽へ之を治めんと（処分しようと）欲す。勘兵衛其家に走り帰り火を縦ち自殺す。竟に其の由る所を知らず。是より城兵、互に相猜疑す。　駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事〔この後、国会図書館本によれば四行分按文あり〕

十日、神祖、常高院及び大阪三媼・青木一重を召して曰はく「余、聞くに、秀頼人（又）兵を集め不軌を図り将に京洛を焼かんとす。故に人心勾（匂）懼し旦夕を保たず。余、不日にして京洛に至り其虚実を験かにせんと欲す」と。是に於いて先づ常高院・二位局をして大阪に帰らしめ大蔵卿・正永尼及び一重を京師に留む。

是日、大将軍、兵を将ゐ江府を発す。　駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事　世子國麻（松脱）呂、留守す。松平下野守忠郷　蒲生飛騨守秀行子。神祖外孫・鳥居忠政・奥平忠昌・内藤政長・酒井重忠並び留寄の任を愛（受）く。福嶋正則・平野長泰、江府に留在す。　難波戦記○冬夏事記曰、時或伝、神祖不待大将軍之至。以幾内中国之兵攻城。大将軍大驚数賜書於本多上野介・藤堂和

泉守、請于神祖以俟駕至

十二日、尾張宰相義直、故浅野左京大夫幸長の女を娶る。

是夜、礼成る。

十三日、神祖入城し之を賀す。 年譜・創業記・駿府記・家忠日記

是日、織田有楽及び其子尚長、大阪より来謁す。 按ずるに、武蔵守尚長、是に先んじ質として城を出づ。神祖、本多正純をして之を幽せしむ。其後放ち城中に還るか。未詳。冬夏事記曰、有楽正月出城奔京師。所以備〔攷〕 有楽言ひて曰はく「大阪の〔諸〕将三協（旅団）と分け為す。七隊長・後藤又兵衛一協として、大野修理亮之れを領す。眞田左衛門佐・明石掃部・渡邉内蔵助一協として、木村長門守これを領す。長曾我部宮内少輔・森豊前守・仙石宗也一協として、大野主馬之を領す。」と。 駿府記・松栄紀事

十五日、神祖名護屋を発す。 年譜・創業記・家忠日記皆係十四日。駿府記曰、十四日雨延及今日。今従之

義直兵を将ゐ名護屋を出づ。 駿府記。按ずるに、諸書頼宣卿発兵の日闕し考ずる所無し。故に書かず 越

後少将忠輝・越前少将忠直・松平利光・松平政宗・上杉景勝・松平利隆・其弟忠雄・京極忠高・京極高知・最上家親・堀尾忠勝・森忠政・松平至鎮・生駒正俊・小出吉英・有馬豊氏・松平康重・細川忠興・黒田長政・加藤嘉明、其余東西の諸将前後相踵して至る。　難波戦記。長政・嘉明向大阪。拠駿府記○諸書載浅野長晟。按ずるに、此の時長晟未だ和歌山を発せず。故に書かず

十八日、神祖京師に至り二條城に入る。

二十一日、大将軍伏見に至る。

二十二日、二條城に入り神祖に謁す。　年譜・創業記・家忠日記・徳川記○難波戦記曰、是時奥州之兵未到。神祖聞大将軍寡兵人（入）伏見不択（釈）。以本多正純為使責之譜不許謁見。大将軍甚憂之。拠上諸書翌日謁見。此説疑妄。故不取。冬夏事記曰、神祖謂大将軍口（曰）、将以今月二十八日出師。大将軍、藤堂和泉守言于神祖曰、加賀・越前・出羽・奥州之兵未至。請、延其期。神祖曰、不然。野戦不論兵之多寡。雖敵数万而我兵有二三千則足矣。其日大将軍還伏見。翌日又至二條城。面請延期。神祖曰、如鄙所命、野戦不用多衆。戎（我）年已遇。不可復戎事。

今段（般）之戦戎（我）前軍。大将軍曰、秀□在此而大人親将前軍則将便秀□処何地乎。請以秀□為前軍。神祖不聴。本多佐渡守進曰、臣聞、前軍後軍左（在）陣列之先後。大将軍在伏見。進於敵城。閣下在京師距大阪頗遠。則大将軍移前軍不可復疑。閣下之言遇（過）矣。神祖曰、然則以将軍為前軍。佐渡守又曰、必以二十八日為期乎。神祖曰、近国之兵未集。則須延至五月朔。議遂定。附以備考

二十三日、秀頼、兵一万余騎を遣はし 拠駿府記 大和を寇(せ)む。邑里を侵掠し居民を殺戮す。梓人(しじん)中井正次の家、法隆寺邑に在り。 松栄紀事曰、法隆寺邑在法隆寺仏閣側故名之 去年東軍大阪城を攻む。正次故(攻)具を修め城中大いに窘(くる)しむ。故に秀頼、之を悪み其家を燔き少長無く皆之を屠る。 和州諸将軍傳係二十六日。城兵陥郡山城下。今従駿府記・難波戦記・松栄紀事○一本難波戦記。反（及）大阪記曰、余焔延及法隆寺。堂塔仏閣悉為灰燼。按ずるに、駿府記、法隆寺堂塔以下恙無し。今之に従ふ 常高院・二位局、京師を往来し又和親を議る。

二十四日、神祖、二尼をして大阪城に入らしめ大虞院に説きて曰はく「去年の喪乱に大阪近県の民庶、生業を営む能はず。此れ固(もと)より当然たり。然れども既に和

親し互に盟約を為せば、則ち当に亟(すみ)やかに客兵を放去すべし。而るに今益(ますます)兵衆を召募す。此れ何用を為すや。兵衆日に増さば則ち糧食日に耗(へ)り終に匱乏座してみるべきに至るなり。又聞くに、城兵武伎を練習し器械を繕修し専ら戦守の備を為すと。伝へ聞くに、四方皆、変、旦夕に在らんと謂(おも)ふと。民、生を聊(りょう)せず（生きた心地がしない）。秀頼、盟誓を因(固)守すれば則ち豈に異図有らん（反心はないだろう）。然れども衆心服し難し。宜しく姑(しばら)く大阪を去り郡山に移居し以て群疑を釋(釈と)くべし。河摂二州民散じ田荒し、一二年間其故(もと)に復し難し。権(かり)に和州を以て之に易へよ。其間に大阪城隍を修繕し以て其旧に仍(よ)れ。此の如くせば則ち両家相和して万方無事たり」と。乃ち大蔵卿・正永尼を大阪に遣還し、青木一重を京師に抱(おさ)へ去るを得ざらしむ。秀頼又諸将を召し和親の可否を問ふ。老臣壮士の所見各異なる。群議決せず。客兵皆、秀頼を以て奇貨（以外な利益のもと）と為す。万一を僥倖し争ひ戦守を勧む。是により和親終に破る。

松栄紀事○難波戦記曰、秀頼人（又）以伊東丹後守・青木民部少輔為使宮（言）

于神祖曰、出大阪城従（徙）大和及遂（逐）客兵決所不能也。若東軍来次（攻）則当委勝敗於天以決一戦。神祖猶使常高院・二位局及二人往来城中以請（講）和。秀頼不聴。載村越長門守入道道半之記曰、和親不成。神祖使板倉伊賀守幽一（二）人於京師。故今夏之戦二人不在城中。拠駿府記・家忠日記等書、無秀頼再遣使之事。伊東長次在城中。及城陥帰順。故得与青木一豊子孫倶全。難波戦記七日、天王寺之戦。亦戦、伊東長次与諸将同陣列。一説蓋伝聞之謬故不取

界津冨饒（ふじょう）の地たり。数百年来兵燹（へいせん）（兵火）に罹らず。商買（賈カ）輻輳（ふくそう）す。去年東軍に拠る。形勢甚だ便たり。故に秀頼之を焼き以て我軍を困んぜんと欲し大野道見をして兵数千を率ゐ之を寇めしむ。道見火を縦ち街市・仏寺を焼く。衆庶波駭す。九鬼守隆・向井忠勝・小濱民部少輔等之を聞く。舟師を率ゐ界津に至り其後を邀む。放銃発喊。道見其の至るを意はず遂に潰走す。難波戦記・松栄紀事

時に関西の諸軍未だ至らず。神祖、敵摂西に侵軼（しんいつ）するを慮り石川忠總をして高槻城を戍らしめ、松平利隆・其弟忠雄をして尼崎・西宮を戍らしむ。松平康重・岡部長盛、丹波に屯し以て山陰道を鎮む。又下令して曰はく「山陰・西海二道の兵、須らく神崎中

島より大阪に趨き、南海道の兵、泉州より東(ママ)会すべし。京極忠高・京極高知・石川忠總、宜しく平潟森口より大坂に入るべし」と。越後少将忠輝を以て一面の総督と為す。大和路より大阪に趨(おもむ)く前軍数部あり。一軍、水野勝成・丹羽氏信・堀直寄(奇)及び大和諸将・松倉重正・奥田忠次・神保相茂・本多因幡守利長 稲葉守利朝子、御称左馬亮 ・別所孫二郎・桑山貞晴・秋山右近・藤堂将監高久 高虎姪或作良次。松栄紀事作嘉以。蓋良次訛為嘉以。今従徳川記・慶元記・難波戦記 ・山岡主計頭景以 冬夏事記作圖書。難波戦記名作景繁。今従松栄紀事。按ずるに、道阿弥の兄に主計頭景以有り。景以疑ふらくは景次と訛り為すか。然れども考定する所無し ・多賀左近・村越三十郎・甲斐荘喜右衛門等之に属す。一(二)軍本多忠政・其子中務少輔忠刻・甲斐守政朝・能登守忠義・菅沼定芳及び伊勢諸将稲景淡路守紀通 蔵人通道子 ・一柳直盛・石田重治・分部光喜・織田民部少輔、之に属す。 按ずるに、織田家譜二つの信勝有り。其一、孫十郎信次の孫隼人信勝。永禄二年卒す。其一、上野介信包の孫刑部大輔信則の子。疑ふらくは此の人なるか。然れども寛永十六年従五位下に叙せられ上野介に任ぜらる。此時年尚ほ少し。民部少輔に

任ぜらる者無かるべし。未だ誰たるかを知らず。三軍、松平忠明及び美濃諸将徳永量重・遠藤慶隆松栄紀事量重作昌重。慶隆作常利。今従城所反仙考訂・遠山友政等之に属す。四軍、松平政宗兵一万五千、忠輝に先んじて発す。総督忠輝一万五千騎を将ゐる。部曲村上義明・清口宣藤、日を更へ前鋒を為す。徳川記・難波戦記・諸将姓名名有詳略。松栄紀事最詳。今従之。但、紀事係二十八日。按ずるに、二十七日、松倉重正出で大阪の兵を追ふ。間（則）ち部分けは其前に在り。創業期日は く、二十四日。本多美濃守・水野日向守・松平下總守出で大和路に屯す。今之に拠り是日に係く。神祖別に水野勝成を召して曰はく「大和路の前鋒最も重任たり。遍く譜第の将士を閲するに汝を過ぐる者無し。命（今）汝に前鋒を為すを命ず。大和の兵松倉・神保・別所・桑山・本多・秋山・藤堂・山岡等を以て汝の部下に属さしむ。丹羽氏信を以て汝に副ふ。須らく氏信と大和口に赴き前軍藤堂高虎・井伊直孝と会ひ議り兵を進むべし。大和の部将如（も）し命を用ゐざる者有らば須らく一二人を勠し以て其の余を懲すべし。今汝に将帥の任を以て命ず。須らく持重し以て衆軍を指揮すべし。慎み昔の一本

槍の態を作(な)して軽出健闘する勿かれ。如し此の命に忤(もと)らば吾必ず汝を罰す」と。勝成感激して去る。水野勝成事記・松栄紀事 浅野長晟、時に兵八千、和歌山を発し泉州信達に屯す。前鋒佐野に至る。佐野は大野治長の采邑。故に治長の兵大野彌五左衛門・北村善大夫、佐野に至り土寇を誘ひ長晟の陣を襲ふ。長晟計を設け善大夫を禽へ彌五左衛門を殺す。土寇逃散す。家忠日記係十八日、難波戦記不日。冬夏事記係二十六日。松栄紀事二十四日。今従之。又按ずるに、家忠日記大野茂右衛門・中村善大夫と作す。慶元記之（大）野五郎左衛門と作す。今駿府記・難波戦記・冬夏事記に従ふ。

二十六日、大野治長の部兵膽駒山(いこま)を歴(へ)大和を寇め郡山城を焚く。城主筒井定慶兵寡く拒ぐ能はず。城を重(棄)て其郷里福須美に奔る。乱平し定慶之を恥ぢ自殺す。徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事○和州諸将軍傳曰、大御所附与力三十六人於定慶与弟紀伊守定慶之、守郡山城。二十六日、箸尾宮内将兵与大野治房部兵合二千余人攻郡山城。慶之請拠険逆撃。定慶怯懦不能用棄城走。及定慶自殺、慶之亦自殺。筒井氏絶 水野勝成、河州角南に趨かんとす。諸書皆作順余或順名。国音

相通。今従松栄紀事。下敕（效ならふ）之　長池に陣し敵南都を焼かんとするを聞き以為へらく、南都、敵の焼く所と為らば則ち恥なりと。星夜之に趨ぐ。敵其の備有るを知り敢へて南都を侵さず。神祖其の功を褒む。　勝成事記・冬夏事記・松栄紀事　大阪城中流言す。東兵数万大和路を越えて来たりと。薄田兼相・井上時利、兵を師ゐ平野に出づ。事妄なり。故に兵を引き還る。　難波戦記　前軍藤堂高虎淀より移り角南に陣し塁壁を築き以て台駕を迎ふ。　家忠日記・高虎行状・冬夏事記　神祖、攻減（城）の計を問ふ。高虎対へて曰はく「宜しく遠かるべく近かるべからず。屢軽騎をして挑戦せしめ其遠出を俟ちて之を撃たば則ち鋒刃の余り皆守心無からん」と。神祖拊掌（手を打つ）して曰はく「子の言我口より出づるが若し」と。　高虎行状　後軍井伊直孝、伏見を発し、榊原康勝・本多忠朝竹田を発し、河内路に向かふ。　冬夏事記

二十七日、稲葉正成、美濃・信濃の兵を率ゐ平潟を戍る。　家忠日記

是日、敵兵郡山東南、南郷寺の田を寇む。松倉重正、五條に在り、相拒つること七里余。（諸書作十余里。今従冬夏事記）常に諜者を遣はし敵の動息を覘（うかが）ふ。諜者之を告げ軽騎輒ち進む。（冬夏事記云、兵可七百）使を隣境諸将に馳せ之を報ず。諸将皆法隆寺に屯し畏縮し敢へて出でず。独り藤堂高久のみ之に馳せ従ふ。奥田忠次出で南都に在り。重正の報を聞く。二十八日兵を率ゐ之に赴く。敵、水野勝成南都に在るを畏れ重正の旌旗を見、国府を越えて走る。重正・高久・忠次之を追ふも及ばず。歩兵六人を禽へ一人を斬り級を京師に一（上）る。神祖・大将軍之を褒む。（徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記○山木義安碑曰、重正年（率）兵撃走之。義安光（先）馳獲敵首。此時也）大野治房、浅野長晟和歌山を発するを聞き虚に乗じ紀州を襲はんと欲す。

是日、兵二万を将ゐ大阪を出づ。（松栄紀事作平三万。亀田大隅記四万。今従難波戦記・冬夏事記）長晟の前軍浅野左衛門・浅野右近・安井喜内・岸九兵衛・亀田大隅高綱（初称溝口半之允。事柴田伊賀守勝豊）・上田重安（拠難波戦記主水重安。此時号宗石。神祖褒樫井之功使養髪。仍旧称主水。召其

子彌右衛門任麾下

・多胡助左衛門等兵五千、佐野に屯す。信達と相距つること五十余町。乃ち攻戦の方略を議る。左衛門市場野に逆戦せんと欲す。高綱曰はく「此地、平衍（えん）。寡兵を以て大敵を捍（ふせ）ぐは難し。此を去り一里退軍し樫井に戦ふに如かず。前に蟻通社有り。松林中八町畷（なわて）有り。林に蔽（かく）れなば則ち敵我が兵の多寡を見る能はず。田路狭隘にて並騎するを得ず。我以て志を得べし」と。衆之に従ふ。左衛門留し市場野に在り。余衆をして樫井に退軍せしむ。亀田大隅事記 治房、佐野に進陣し長晟の前鋒退軍するを見以て撃つべしと為す。乃ち大野治長の部将宮田平七を以て岸和田城主小出吉英及び援軍金森可重に備へしむ。平七の兵寡く故に槙島昭光父子・赤座内膳正をして界津を去らしめ之を援く。大野道見、界浦に屯し後継を為す。治房の前鋒塙直次、兵三千を率ゐ大鳥越を過ぎ中泉に出づ。道見、界津の人家を燔く。此の火光に乗じ闇夜行兵に利あり。

二十九日黎明、直次蟻通社北を過ぎ南に向きて馳す。淡輪六郎兵衛重政、和泉路

の嚮導を為す。　家忠日記・松栄紀事曰、塙團右衛門・長岡監物・岡部大学、率軽騎一千、経八町畷至樫井。今従難波戦記・冬夏事記・元寛日録。按ずるに、勇士一言集、六郎兵衛、喜兵衛と作す。蓋し初称なり　山口兵内兄弟能く紀州の地形を諳る故に前鋒を為す。直次は驍将なり。岡部則綱、当に直次と勇を争ふべく夜潜かに城を出で、直次に先んじて至る。直次忿り闘はんと欲す。淡輪重政・山田五郎左衛門、之を和解す。則綱・直次・重政相並びて馳す。紀兵八町畷を経、樫井邑に入らんと欲す。敵兵逮び至る。亀田高綱銃卒五十を列し之を撃つ。大阪の大軍少しも沮けず勢に乗り競進す。高綱、八町畷を退くこと二町ばかり、又列卒故銃す。浅野左衛門単騎来往し方略を指授す。長瀧村民一十人ばかりをして蟻通社の北に出でしめ、林中に伏兵有りと詐り告ぐ。故に直次・則綱、兵を分け代を敺つに其の至るを待つ。無予進まず。　亀田高綱以下拠冬夏事記　既にして則綱先登し陣を陥し被創して退く。直次、上田重安と槍を接し互いに傷す。是れ樫井第一槍と為す。　元寛日録曰、團右衛門与亀田大隅接槍。今従松栄紀事　高綱、重安接戦す

るを見、馳せ樫井河原に出で之を横衛す。敵敢へて進まず。重安、樫井邑の後に陣し高綱邑中に馳せ入る。重安と合ひ血戦甚力す。淡輪重政深く入り出づる能はず。浅野左衛門の兵永田次兵衛之を斬り級を獲る。

按ずるに、直次・重政一（二）人の碑樫井に在るを見る

直次の兵阪田荘二郎、重安と相搏ち重安幾んど危ふし。横江平左衛門来救し僅かに免る。直次、左右に指麾し其鋒甚だ鋭し。多胡助左衛門之を射中（いあ）つ。直次馬を墜ち、八木新左衛門其の後（級）を獲る。

駿府記曰、上田宗石斬團右衛門。大隅事記曰、大隅以槍鎗團右衛門。大隅之兵菅原兵左衛門獲其首。二説不同。今従徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・元寛日録・松栄紀事

紀兵、又吉田浅右衛門・熊谷忠大夫・首藤忠右衛門等を斬る。敵支ふる能はず徐ろに引き去る。亀田高綱、樫井街市の北に出で以て敵の至るを待つ。敵、安松に向きて去る。高綱孤軍追撃する能はず。互いに兵を引き退く。

冬夏事記○難波戦記曰、淡輪六郎兵衛・塙團右衛門戦死。然敵兵勇気不撓。岡部大学又進兵余相継突戦。紀兵戦疲少却。敵兵乗勝遂（逐）之。浅野長晟聞敵在樫井進麾下兵。其兵小野慶運見機励衆横撃之敵不能進。亀田大隅・上田主水・安井喜内・

多胡助左衛門・岸九兵衛等還戦。敵敗走。拠冬夏事記。岡部大学先是曰、（回）馬独退不復還戦。難波戦記、率多文事（華）。冬夏事記俚而近実。慶元記亦云、絶（紀）兵欲再戦、聞土寇邀後軍議不決。日既昃故歛軍入信達。按ずるに、長晟、種村肖推寺の諫めに従ひ兵を進めず。下文に詳し。故に今二書に従ひ、戦記の説を取らず。大野治房、貝塚願泉寺に在り。犒士（兵を慰労する）設宴。樫井の戦を知らず。直次・重政の敗死を聞き大いに駭き兵を進む。長岡監物・上條又八・御宿政友以下先に樫井に至る。紀兵既に樫井河を渡り南向して去る。及ばず治房、樫井河原に至る。日既に晡（夕暮れ）、紀州は険要の地。冒進する能はず。遂に兵を引き還る。浅野長晟、大阪後軍の樫井河原に至るを聞き進み之を撃たんと欲す。種村、肖推寺諫めて曰はく「今朝の捷、敵離群して進み、事不意に〔出づ〕。今後軍と戦ふ、其れ殆ど不可なり。且土寇蜂起すと聞く。回軍するに如かず」と。長晟之に従ふ。重安・高綱等獲る所の首十三級を京師に上る。冬夏事記 大野治房還り岸和田城下を過ぐ。小出吉英及び援軍金森可重出で之を躡ふ。敵人敗走す。城兵追撃し二三十級を獲る。紀州の賊

多賀羅兵衛・戸津川八蔵・湊宗左衛門等大阪に党し和歌山城を襲ひ之を奪はんと欲す。吉野・熊野の賊之に与す。其党二千人に幾し。浪花戦記作三千人。慶元記曰、日高・有田二邑賊之即吉野熊野地也。

晦、神祖・大将軍、書を長晟に賜ひ樫井の功を褒む。長晟、賊起つを聞き軍を回し之を撃つ。兵二千を分け海陸並び進む。鹿瀬無阪の険を越え急攻し之を破る。魁帥二十一人を斬り其余を磔す。宗左衛門出で走り其の之く所を知らず。党与悉く平す。神祖、長晟をして帰藩し之を鎮めしむ。家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・元寛日録・松栄紀事○冬夏事記曰、長晟使溝口五左衛門・熊澤兵庫・長谷川志摩助（勦）賊克之。兵庫子斬魁帥山室鬼介。

余党悉平　秀頼、前月二十八日神祖出師するを伝へ聞く。故に間諜を京師に遣はし難波戦記曰、数十人。按ずるに、間諜許多（あまた）有るべからず。人多くは則ち露はれ易し。故に其数を書かず駕出（家康の発駕）を候ひ京師を焼かんと欲す。而るに神祖、稽延し発せず。板倉勝重〔計〕を設け之を捜索し事発覚す。勝重皆之を捕へ訊鞫す（厳しく問いただす）。賊自首す。古

田織部正の茶道木村宗喜、実は謀首たり。　髡首（こんしゅ＝坊主頭）。専掌茶道者。俗謂之茶道

五月朔、古田重然を拘ふ。宗喜及び其党を捕へ之を訊鞫す。　家忠日記・慶元記・難波戦記・大阪記並曰、諫宗喜。拠駿府記宗喜被戮左（在）下文。今従之○冬夏事記曰、四月六日、橋（僑）人戸田八郎右衛門称復元讐、殺江州代官鈴木左馬助於口野岡、奔三井寺。検夾箱中有大阪密書。板倉伊賀守上之二條城。推究甚急。左馬助婦翁石田織部連座。捕織部茶道木村宗喜、得党与二十余人下獄。此人一説也。浪花戦記曰、市人来告有異色人。還于神泉苑。板倉勝重追吏卒捕十六人鞫問之。賊自首曰、宗喜之党也。故逮捕之

三日、神祖、松平定勝をして伏見より移し二條城を守らしめ、水野勝成をして南都を出で法隆寺に陣せしむ。　家忠日記・松栄紀事　是に先んじ、細川忠興前鋒を為すを請ふ。近臣及び弓銃手を帥ゐ小倉を発し水路より急ぎ大阪に趨（おもむ）く。其子忠利、歩騎一万余人を帥ゐ陸路より進む。

是日、忠興の舟摂州花熊に至る。神祖以て前鋒を許す。然れども兵寡少たるを見るを以て藤堂高虎の軍に併す。　細川家傳録

四日、大将軍、水野勝成を召し黄金五十枚を賜ひ以て之を労ふ。　家忠日記・勝成事記・松栄紀事

是日、神祖・大将軍、米澤中納言上杉景勝を二條城に召し命じて曰はく「京師は根本の地なり。大阪城陥つるに訖(いた)らば、卿須らく八幡に屯し平潟・河内路の往来を検し以て京師を警衛すべし」と。　冬夏事記

五日、神祖、兵一万五千騎を将ゐ二條城を発し河州星田に至る。荘田小左衛門旗奉行を為す。　難波戦記・浪花戦記並び曰、旌旗七流。金扇・銀瓢・大小馬標各一。大樹寺僧登譽所言吉例之旗蔵匣齎之。神祖唯致仕故示謙遜如此　尾張宰相義直の騎士一万五千、成瀬正成・竹腰政次前鋒を為す。遠江宰相頼宣の騎士一万、安藤直次・水野重仲前鋒を為す。義直・頼宣、親軍を翼衛す。　年譜・創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記。神祖及義直・頼宣二卿兵数拠松栄紀事　諸軍をして三日の糧を斉(そろ)へしむ。自給甚だ薄し。　難波戦記曰、神祖召厨人松下常慶、斉日餐五升・乾魚一頭・塩醤・松魚（かつお）脯（干し肉）一櫃収之。其余固禁之。人皆服其倹素能慣戦陣。松

栄紀事曰、神祖聞後藤・薄田出大和路、木村・山口・長曾我部出河内路。輒発軍曰、戦既勝矣。命裏（嚢）三口（日）糧。按ずるに、此れ即ち下文、明日神祖・大将軍の使久貝忠三郎・高木廣正に答ふるの語と固（同）じにして二事に非ず。故に書かず浅野長晟、山口に屯し以て寇賊を勦す。三十余人を獲り之を川錫（鍋）に斬り其級を上る。徳川記細川忠興淀に至る中路に神祖に謁す。神祖、輿を停め本多正純を召して曰はく「我嘗て忠興衆に先んじて来と謂ふ。今果たして然り」と。細川家傳録

是日、大将軍、兵を将ゐ伏見を発す。難波戦記係三日。拠駿府記、初十三日、廷（延）至今日。年譜・創業記・徳川記・冬夏事記・松栄紀事皆係五日。今従之土井利勝、左軍を将ゐる。佐久間安政・其弟勝之・堀親良・高力正房・溝口善勝・由良貞繁・堀淡路守直重等之に属す。直重丹後守直奇弟総一万。酒井忠世、左（右）軍を将ゐる。細川興元・北條氏重・鳥居成次・杉原長房・新荘直定・土方雄重・脇阪主水正安信等之に属す。安信、淡路守安元弟総一万。本多正信・松平忠昌・立花宗茂・其弟直次・本多忠純・前田利孝・日根野

吉明・秋元冨朝・菅谷左衛門範貞及び那須・由利・蘆田・津金・武川の兵継（総）一万五千余騎之に次ぐ。大番六隊騎将阿部正次・内藤大和守重頼（修理亮清成孫百助正勝子。初称弥三郎作若狭守後更任）・松平定綱、左軍を為す。高木正次・青山忠俊・水野忠清、右軍を為す。総三万余騎又之に次ぐ。大将軍の親兵二万余騎。長槍弓銃整列して出づ。角南に至り星田営に来謁す。是に先んじ、諸将前後相継して発す。第一藤堂高虎、第二井伊直孝、第三榊原（「康勝・・・以下第四～第七」脱文（国会図書館本十四行分脱））（大野治長、後）藤年房に（問ひて）曰はく「方略何如（いかん）」と。年房曰はく「平原曠野に、大御所の旗鼓と相当るべき者、吾未だ其人を見ず。険に拠りて戦ふは兵の要道なり。愚を以て之を料るに、東軍必ず大和路を越えて来たらん。我鉄騎を以て険要に拠り半途に邀（ま）ち以て之を迎撃せば以て忠（志カ）を得ること什（じゅう）に七八。前軍既に破れなば則ち後軍必ず退く。而れば南都・郡山を保ち其勢に因り転化決策すべし。此れ勝を制するの術なり」と。治長之を然りとし秀頼に言ふ。秀頼、年房を以て

大和口の大将と為す。冬夏事記○難波戦記曰、四月晦、後藤又兵衛建議大野治長然之。然性素矜傲。欲建策以為為己功。故不言於秀頼。又兵衛怒翌日出屯道明寺口。秀頼聞之驚遣使召還。又兵衛報曰、死於此地固臣之分也。秀頼無如之何。乃遣眞田左衛門佐・明石掃部・渡邉内藏助・井上小左衛門等為援。徳川記・慶元記・勝成事記・松栄紀事皆云、五月五日又兵衛出兵平野。拠冬夏事記、二十六日城将議軍事二十八日又兵衛出屯平野。五月五日夜半発平野六日早旦戦于道明寺口。詳于下文大和路総督越後少将忠輝而(南)都に駐軍し、松平政宗郡山に屯す。松栄紀事曰、南都云（去）大阪七里。郡山在南都西前軍三部。水野勝成・堀直奇及び大和諸将松倉重正・其子長門守重次・其弟十左衛門重能・藤堂高久・丹羽氏信・桑山貞晴・本多利長・神保相茂・別所孫二郎・秋山右近・多賀左近・奥田忠次・村越三十郎・甲斐荘喜右衛門・山岡景次等景次疑景以之訛説見上一部を為す。本多忠政・及び伊勢諸将一柳直盛・古田重治・分部光喜・菅沼定芳等一部を為す。松平忠明・及び美濃諸将織田民部少輔・稲葉紀通・徳永量重・遠藤慶隆・西尾忠政等一部を為す。徳川記・慶元記・松栄紀事政宗の前鋒片倉小十郎盛重松栄紀事作重綱。即景綱也。在上文。

拠勇士一言集、奉此役者景綱之子而襲称小十郎。一言集曰、小十郎初従軍。其自奥州入江戸至千住駅建鐘紋旗。率部兵登愛宕山祈神。誓以大阪之役不立武功則不復帰故郷。竟如其言。名盛重拠片倉系図。○冬夏事記曰、政宗与与小十郎謀謂監使村瀬左馬助・中山勘解由曰、小十郎之陣営無水。請設（就）水草便地。二人許之。小十郎移陣于片山側。前後（渓）水而与松倉豊後守・奥田三郎右衛門相並而陣。故六日早旦得与敵戦

進み河内に至り円明寺駒谷に陣す。政宗逗橈（とうどう）し進まず。故に忠輝南都に留在す。

是日、晡時、水野勝成・堀直奇・松倉重正・其子重次・其弟重能・別所孫二郎・奥田忠次及び監使中山照守・村瀬重治、片山に上り形勢を巡察し還り国府に屯す。

勝成事記・松栄紀事○勝盛（成）事記・冬夏事記並曰、勝成屯国府軍騎出赴片山偵敵。大和諸将、諸（請）従行。勝成曰、侯騎不容衆多。唯許主将一人。諸将従之。皆単騎従出登片山察形勢。諸将皆曰、好戦場、須陳于此地。勝成曰、吾家（蒙）大和口。前鋒之〔命〕諸将勿復言。既而本多美濃守遣使調勝成曰、卿宜屯片山。吾移屯国分。勝成応之曰、後軍須守前軍之号令。而反指揮前軍。甚不可也。孫二郎・丹後守及監軍村瀬左馬助固請屯片山。勝成作色曰、曩在二條城。大御所面命大和諸将、如有不用命者頂（須）戮一二人以懲其余、正此謂也。節制在我不用喋々多言。片山之南

接藤井寺。地形平衍敵出大阪過藤井誉田。従片山之上直撃我兵則必不能支。国分距片山不遠。中有田功（切）川地形頗便。今夜屯国分明旦自大路経石川原、繞出玉手圓明寺、前後交撃則片山之敵可一挙而殲之。勝敗之機在致敵与致於敵。左馬助殿為監使須断可否。其余諸将不得容喙。中山勘解由然之曰、日向守殿所言是也。勝成喜曰、勘解由殿与吾所見同。乃率諸将還国分。附以備考

後藤年房、一万四千余兵を率ゐ夜半平野を発す。兵数拠難波戦記。夜半発平野拠冬夏事記

薄田兼相・槙島昭光・井上時利・山川賢信・北川宣勝・山本左兵衛等と大和路に向かふ。眞田信仍・渡邉尚・伊木遠雄・大谷吉久・明石守重・毛利勝永・小倉行春・長岡興秋・大野治長の部兵宮田半七等、後拒を為す。大阪記曰、前軍後藤又兵衛兵一万騎、二軍薄田隼人正・山口左馬助五千余騎、三軍増田兵大夫五千余騎。附以備攷

年房、夜に乗じ道明寺口に至り我軍を襲はんと欲す。火を炬げ天を燭し藤井寺辺に至る。天将（まさ）に暁けんとし、乃ち炬を減ず。水野勝成営に還るも甲を卸さず炬火を望見す。諸軍を戒めて曰はく「此れ必ず敵不意に出撃す。宜しく之に厳備すべし」と。既にして年房の兵、迷ひ道を失い古市に至る。松栄紀事曰、道明寺去大阪五里、古市在道

明寺南一里　軍士驚懼す。年房、衆を励まして曰はく「前に河水有り後に誉田八幡有り。此地防戦に利有り。宜しく馬に飲ませ敵を待つべし」と。衆踴躍して進む。水野勝成・松平忠明・堀直奇・松倉重正・本多忠政・本多利長・桑山貞晴・神保相茂等片山を前にして小泉左右に陣す。年房、諜を遣はし之を覘ふ。諜、大軍河州国府の後に在るを見ず。報して云はく「東軍三千に満たず」と。年房勇を恃み諸軍に告げず、独り部兵を率ゐ出で片山の松林に陣す。

六日遅明、年房の前鋒古澤四郎兵衛・山田外記、馬(鳥)銃を発し我軍を撃つ。松倉重正、馬を田路に馳せ山を傍にし先登す。奥田忠次をして山上の敵を撃たしむ。忠次従はず、直だ片山の険を冒して進む。年房の前鋒と遇ふ。従兵下野道二・岡本加介　冬夏事記曰、奥田三郎右衛門、僅領三千石。養客兵有名者五人。謂諸将曰、此戦若使東兵先登則大和将士何面目見人乎。竟如其言○先臣佐々宗淳曰、道三（二）旧称河波伊兵衛。始仕加藤清正、後仕寺澤廣高。致仕居南都称下野道三（二）。加介、関白秀次旧臣。為僑人居南都。至是皆属眞田忠次戦死　・神子田四郎兵衛等十七人皆

戦死す。忠次憤激して進み竟に鉛に中り死す。水野勝成、兵を進め山上の敵を撃つ。敵兵下山し田間に戦ふ。両軍格闘し勝敗未だ決せず。松倉重正、片山の北を経、年房の左軍と闘ふ。父子力戦し級を獲る。松倉重能隻眼を傷し猶ほ能く健闘す。藤堂高久・天野半之介可古、善く闘ひ凡そ三十余級を獲る。然るに敵多兵にして競ひ撃つ。重正囲まれ幾んど危ふし。従兵来救し僅かに免る。堀直奇、第二軍に在り。槍を揮い馳突し部兵皆殊死（しゅし）戦ふ。徳川記・慶元記・冬夏事記・松栄紀事。按ずるに、道明寺口の戦、難波戦記頗る異同有り。今上諸書に従ふ。下之に効（なら）ふ。松平忠明、片山の東に陣し兵を山下に進め形勢を覘ふ。敵兵銃を発す。忠明の従兵山田十郎兵衛・菅沼七郎右衛門槍を揮ひ力戦し之に死す。奥平金彌・川北権兵衛突戦し級を獲る。衆兵奮撃し三十余級を斬る。松平忠明行状・松栄紀事○山本義字（安）碑曰、五日、水野勝成張陣国分。松倉重正乗夜渡大和川進。先諸軍八町。六日未明、重正先鋒進登高井田之堤。大阪前軍在道明寺林端。重正馳馬望之。麾従軍上片山。敵兵後藤又兵衛率騎卒四五千人出玉手登山。重正励士卒諭之曰、此山短松叢生。不便馳駆。山麓有路。

汝等見敵軍半登而衆皆下山従麓直突麾下。則既登之兵不能救之。我軍僅雖千余人、然与敵之半軍相当。彼麾下軍敗則前軍既登者皆不戦而潰耳。我大軍在後。可相踵而進。此必勝之計也。即使従騎田中兵衛宗久馳告勝成以進後軍。重正分軍為二隊急襲敵陣。山本義安先登揮槍獲首第一。忽天（失）槍。堂（望）見槍符在敵陣為恥馳突陣中得其槍還。欲謁重正。重正不在陣所。義安以為、重正戦死。即欲殉死棄其首。告藤堂将監使証之。馳入敵陣遇天野半之助可古告以重正不在。可古亦同馳馬左廻右旋。会重正父子戦酣。義安・可古、亦同奮戦。重正之族生田伊兵衛・池田左兵衛家長・井村助兵衛重隆戦死。後藤之兵敗走。於是諸軍皆戦、大阪之兵大敗。按ずるに、重正の戦功は碑文悉（つく）せり。附し以て攷に備ふ

片倉盛重進み、片山下に至る。前に深沼有り。一石橋を架く。水野勝成騎して先づ渡り中山照守之に次ぐ。勝成の子美作勝重之に次ぎ村瀬重治又之に次ぐ。本多利長の前鋒石橋より先んずること三町ばかり。敵兵之を撃ち走る。勝成父子・照守・重治石橋に拠り槍を揮ひ敵を却く。 勝成事記・冬夏事記

本多利長時に十六歳、部兵の走（にげ）るを見大いに怒り伯父外記と進み闘ふ。敵を斬り部兵も亦還り闘ふ。 難波戦記

後藤年房、麾下の兵纔かに四五十騎、片山の半腹に陣す。松平忠

明、山を登り嶺を踰(こ)ゆ。松平政宗山麓を遶(めぐ)りて西す。年房三面に囲みを受け免るべからざるが如し。従兵に謂ひて曰はく「死せんと欲せざる者速やかに城中に還れ」と。従兵皆死を以て誓ふ。年房下山し馳せて広衍の地に出で突戦す。東兵争ひ進み之を撃ち古澤四郎兵衛以下数輩を斬る。片倉盛重の部兵放銃し年房の胸を洞(つらぬ)く。年房重創して死す。時に四十六。難波戦記曰、又兵衛中鉛重創。招吉村武右衛門曰、勿使敵獲吉（吾）首。宜蔵深泥中。武右衛門如其言。故時人莫知其死者。冬夏事記作金方平右衛門。創業記・駿府記・徳川記・松栄紀事皆云、又兵衛中鉛元（死）。但、徳川記曰、不知其賞（実）。慶元記曰、又兵衛遁戦場匿紀州山中。難波戦記亦戦（載）一説云、然諸説紛云云。相伝、他年黒田長政之士過（遇）年房於山中。蓋其黒（実）不死也　年房の前鋒山田外記以下、年房の死を聞き悉く敗走す。道明寺西藤井寺辺に至り槙島昭光父子還り闘ひ又走る。明石守重・長岡興秋・小倉行春・北川宣勝等戦はずして走る。山本左兵衛戦死す。冬夏事記　薄田兼相・井上時利・山川賢信・増田宗重等鋭気哀(衰)へず進み我軍と戦ひ秋山右近戦死す。水野勝成頻りに放銃し之を攻む。槍

を揮ひ力戦す。丹羽氏信の勁騎三百横から敵軍を撃ち之を破る。勝成・氏信遂に北(に)ぐ。誉田に至り又大いに戦ひ、井上時利を斬る。菅沼定芳の族菅沼権右衛門其級を獲る。敵敗走す。　難波戦記曰、徳永量重・遠藤、慶元記与兼相戦、戦疲而退。稲葉紀通・西尾〔忠〕政継之。与増田兵大夫・井上小左衛門之兵戦斬兵大夫・小左衛門。紀通・忠政之兵亦多死。本〔脱□多忠政・松平忠明以下東軍悉力拒戦、兼〕相及槙島玄蕃頭父子・山川帯刀等敗走。猶有衆一万五千陣誉田八幡山。水野勝成与玄蕃頭接槍遂敗之。与此異。拠徳川記・冬夏事記、増田宗重戦死平野。在下文。今従勝成事記・冬夏事記・松栄紀事　薄田兼相、状貌魁偉、膂力(りょりょく)人に邁(す)ぐ。去年博労淵を失するを恥ぢ戦必死を決し、縦横に馳突す。片倉盛重与(とも)に戦ひ二十八級を獲る。盛重の兵も亦多く死す。兼相大刀を揮ひ七八騎を斬り竟に戦死す。　松栄紀事曰、斬十数人。難波戦記曰、可十騎。今従徳川記　水野勝成の兵河村新八郎其首を獲る。松平政宗の軍八千銃を連放す。残兵悉く潰走す。　徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事○冬夏事記曰、水野日向守之士河村新八与薄田隼人相搏。中川島之助・寺島助九郎二人来救助九郎。獲隼人首。新八近習而有寵于日向守。故日向守為新八之功。助九郎憾之翌日戦死

是日詰耳（旦）（きったん＝早朝）、大将軍、久貝忠三郎・高木廣正を以て使と為し神祖に言ひて曰はく「城兵、大尾（矢）人（久）寳寺に出で、藤堂和泉守・井伊掃部頭、将に接戦せんとす。故に大将軍既に伏見を発す」と。神祖曰はく「敵兵城を出づるは戦勝の兆なり」と。登時（すぐに）星田を発し平岡に至る。難波戦記　近臣鎧を進む。神祖曰はく「豎子（じゅし）（青二才）を討つに何ぞ鎧を用ゐ為さん」と。遂に之を却く。創業記　水野勝成、使を行営に遣はし獲る所の首級を上る。神祖召両御所聞之善縫殿頭之言　出で矢尾に向ふ。藤堂高虎、暁に千塚を発す。行営に詣で号令を受く。千塚に還り将に道明寺口を過ぎんとす。其間に人（大カ）和川二道有り。相去ること三十余町。一道は矢尾・久寳寺の間に在り。渡邉誰庵自記・松栄紀事曰、千塚去矢尾四十余町。久寳寺在矢尾西南　城兵矢尾追（堤）を循（めぐ）り連綴（てつ）すること三十余町。高虎の前軍三隊。藤堂高則左軍を将ゐ、桑名一孝旧本（長）曾我部盛親之将。在上文慶長二年盛親敗亡事高虎・藤堂宮内・渡邉掃部等之に従ふ。藤堂良勝右軍を将ゐ、藤堂玄蕃良重・藤堂勘解由氏勝・田中内藏允・友田左近右衛門

之に従ふ。渡邉了、中軍を将ゐ重成の兵を見、使を高虎の陣に馳せ之を告ぐ。左右二軍を止め進むを得ざらしむ。高虎怒り使を遣はし了を責めて曰はく「何故之を止む」と。了、高虎の陣に馳せ至りて曰はく「此他(地)は水田。戦闘に利あらず。須らく南方道明寺に至り交戦すべし」と。高虎之を然りとし前軍を召し還す。本軍を率ゐ飯盛大路より南行す。了、小阜に登り敵を望み亦馳せ高虎に謂ひて曰はく「南行の敵忽ち転じ東向す。是横から我軍を衝たんと欲すればなり。然れば此地に陣を置くべからず。西に横堤有り。此を云(去)ること十町に幾(ちか)く、田間の道路四有り。宜しく此路により堤に至り整列し機を見決戦すべし」と。高虎之を許す。左軍の将藤堂高則・桑名一孝等矢尾に向かひ、右軍の将藤堂良勝・藤堂良重等相継して進む。了、高虎の命を以て高則・良勝に謂ひて曰はく「宜しく西堤に至りて上ぐべし」と。皆聞かずと為(な)す。堤西を過ぎて行く。其余二道の兵も亦同じく進む。了、之を見、其違令を怒る。然れども之を如何(いかん)ともする無し。田路湫隘(しゅうあい)左

右皆深泥、並騎するを得ず。高則・良勝等陣列を復する無し。二三騎に星散す（散らばる）。長曾我部盛親、兵を矢尾堤下に伏せ出で之を撃つ。我軍大敗す。高則・一孝・宮内・掃部・山岡兵部重成以下皆戦死す。良勝・良重・氏勝等玉造堤を過ぎ西郡萱振村に至り木村重成の本軍と戦ふ。拠徳川記・慶元記・冬夏事記。重成前軍出若江与井伊直孝相当。故良勝等与本軍戦澤田但馬先づ鳥銃を放つ。其子平大夫級を獲ること第一。難波戦記藤堂式部、衆に挺（ぬき）んぢ善く闘ふ。右軍凡そ二百余級を獲る。然れども敵兵拒戦し我兵の死者六十余人。良勝・良重・内蔵允・左近右衛門皆力戦して死す。氏勝大呼奮勇血戦して亦死す。高虎の左右軍将以下老臣宿将多く戦死し、従兵の死者二百六十余人。高虎行状、左右二軍戦死各三十余人。家忠日記作七十余人。合左右二軍而書之是也。松栄紀事作三十余人。偏挙一軍非事実也。按ずるに、左右二軍、盛親・重成と各処に戦ふ。数諸書記する所同じからず。慶元記・難波戦記二百余人。蓋挙兵総数。冬夏事記曰、甲士六十三騎歩卒二百余人。今従之。○難波戦記曰、高虎聞渡邉了之名、召為家老寵遇殊渥。老臣等皆嫉之曰、吾輩戦功不可勝計。今寵勘兵衛一人。似復無人。及大阪兵興、藤

堂新七、饗仁右衛門・宮内・玄蕃・勘解由等八九人停酒杯謂之曰、吾欲先之而戦死。皆曰、可。吾輩亦与子同死。独勘解由不聴曰、何発此不忠之言。将校皆死、有誰擁護主君乎。新七嗤曰、擁護主君、勘兵衛一人足矣。其余不足復用。乃擬酒盃於勘解由。勘解由不復辞。引満（酒をなみなみとつぐ）誓同死。至是皆戦死

了、高則・良勝等と相協せず。故に其敗死を見るも終に之を救はず。二軍の残兵旌旗を棄て矢尾東に向きて走る。了、之を見馬を進め盛親の軍を横撃し之を破る。二十余級を獲る。了の子長兵衛、父に先んじ敵と矢尾西堤に戦ひ敵二人を斬り矢尾河原に出でんと欲す。而るに敵之を邀つ。盛親の本軍の南に繞（めぐ）り出で矢尾の民家に入るを得。了、河原に出で本軍と久寳寺に戦はんと欲す。然れども敵形勝に拠り兵寡く戦ふを得ず。東堤下に陣し数（しばしば）使を高虎の陣に遣はし兵を進むるを請ふ。高虎、其の高則・良勝等を救はざるを銜（ふく）み終に進まず。

慶元記曰、高虎奉神祖之命暁発十（千）塚向道明寺口。而木村重成出兵故不得已従渡邉了之言与長曾我部盛親戦。然畏其違令故不敢進。冬夏事記曰、此時高虎自馳至行営。馬上呼曰、請、亟進馬。言未畢横田甚右衛門大声曰、何等痴者（しれもの）救請進馬。壮士宜出遂（逐）之。高虎無語而

還。神祖召畠山入庵曰、東兵閑於我（戎）事発言可聴。入庵対曰、非甚右衛門不能発此言。得（併）附備考 麾下の壮士、高虎の命を得ず、往々前に来。長兵衛も亦此に来ること三百騎ばかり。了の兵稍振ふ。盛親、残兵を追撃し東向し去る。了、大いに発喊し之を追ふ。盛親軍を還し矢尾村中に戦ふ。敵兵皆疲る。盛親指揮し之を励ます。兵復た振ふ。了、微かに退き接戦すること数回。盛親支ふる能はず兵を引き久寳寺村に退く。了、之を追撃す。敵兵潰走し平野より北ぐること二十余町。了、尾撃し三百余級を獲る。増田宗重、平野に戦死す。難波戦記曰、高虎之兵浅野平三郎獲其首 盛親僅かに脱し城に入る。了、平野を扼ふ。高虎、使を馳すこと凡そ七たび。了をして火を矢尾地蔵堂に縦たしめ兵を引き去る。了も亦使を馳せ言ひて曰はく「臣、数盛親と闘ひ未だ嘗て敗衂せず。請ふ、速やかに馬を進めん。盛親を斬るは臣の掌握中に在り」と。高虎大いに怒り之を罵りて曰はく「汝死地を遁れて放言す。命を用ゐずして恣睢す（わがままにふるまう）。罪誅を容さず。亟やかに引き去るべし」と。了、平

野を固守し去らず。既にして大将軍の監使小澤忠重・永井白元来たり平野を守るを伝命す。慶元記・永井白元作本多正重。今従難場戦記・冬夏事記了、二人に謂ひて曰はく「道明寺の敗兵将（まさ）に走り城に入らんとす。其前路に遣（邀）たば則ち一人たりとも生還せしめず。明日の戦に摧陥するは甚だ易し。天下の安危は此一挙に在り。臣、敢へて私功を貪（むさぼ）るに非ず。正に公事を憂ふるのみ。藤堂仁右衛門・桑名彌次兵衛等盲将、兵を知らず浪戦して死す。和泉守深く之を惜しみて口を極め詆呵（ていか）（そしる）し、臣の言を用ゐず。請ふ、和泉守に勧め速やかに旌旗を進めんことを」と。二人之を然りとし馬を回し高虎に告ぐ。高虎聴かず。徳川記・難波戦記・冬夏事記・渡辺誰庵自記道明寺の敗兵果たして平野に至る。時に了、兵八百余有り。銃を発し之を撃つ。敗兵駭（おどろ）き走る。高虎又使を遣はし督促す。了、対へて曰はく「臣既に平野を扼ふ。兵を賜はば則ち南に馳せ之を邀たん。敗兵城に入るを得ず、遁れ界住吉に至る。眞田・毛利も亦進退拠を失せん」と。高虎終に許さず。了、已むを得ず暮れに抵り火を

平野に縦ち兵を収め去る。時の人皆、高虎私忿を以て大利を失すと議（議カ）る。 徳川記・慶元記並曰、高虎陣平野西。道明寺之敗兵不知為我軍走至平野。高虎之兵欲撃之。敵駭走入城。今従冬夏事記 高虎、朝間に獲る所の二百余級、総五百六十余級、之を平岡に上る。神祖之を褒む。 家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・渡辺誰庵自記。按ずるに、大阪首帳、高虎獲る所八百六十四級なり。蓋し、前後の総数を挙ぐるなり○松栄紀事曰、初盛親出兵百騎一千。及敗還僅存三百。按ずるに、高虎斬る所の五百六十余級、木村重成の兵も亦其中に在り。然れば則ち盛親の兵の死亡は四千七百人に幾し。必ず此の如くの多きに至るべからず。故に今闕疑し書かず。 高虎、兵を引き矢尾村に屯す。 徳川記・慶元記 木村重成の前鋒山口弘定等黎明矢尾堤に至り若江に向かふ。井伊直孝、若江を距つること五十町、楽音寺村に陣す。前鋒庵原助右衛門一千余騎、及び山口重政・其子伊豆守重信、重成と若江に戦ふ。重成、平塚五郎兵衛をして士卒を指揮せしむ。 若江合戦記。按ずるに、是に先んじ、重信大阪城に刺客として入らんと欲す。、本多正信・土井利勝、書を寄せ之を止む。忠（志）遂ぐる能はず。事上文に在り。重改（政）、大阪再乱を聞き子重信と来。直孝の陣に属し前鋒に副ふ○冬夏事記曰、平塚五郎兵衛、

因幡守為廣之姪也。去年冬有戦功故秀頼授麾為長門守之副　堤を隔て頻りに鳥銃を発す。直孝の兵並進し先を争ふ。重政諭して曰はく「敵軍未だ進まずして我兵争ひ競はば則ち死傷必ず多し。整列放銃し勢に乗り之を撃つに如かず」と。衆聴かず。重政父子衆に先んじ堤に登り敵と槍を接す。重信先づ首級を獲る。　鵞峯文集・山口重政碑銘　庵原助右衛門、機を見、兵を進め堤を奪ひ之に拠る。　冬夏事記　是に先んじ、河野權右衛門通重・皆川志摩守隆庸　山城守廣照子　並び譴を蒙り屏居す。二人潜かに来、直孝の軍に従ふ。通重健闘し級を得ること第一。隆庸も亦斬獲の功有り。神祖之を褒め二人の罪を釈す。　難波戦記・松栄紀事、隆庸釈罪拠慶元記。　重成、長屋平大夫・河崎和泉・佐久間蔵人・牟禮彦三郎等　難波戦記、彦三郎作孫兵衛。今従德川記・慶元記・冬夏事記。蓋一人而史称也　鋭兵二百余騎を選び突戦す。直孝の旗奉行　孕石豊前　松栄紀事作源右衛門。蓋初称也　・宰臣川手主水成次　難波戦記作主税誤。初称忠太郎松平石見守康安第三子。養於川子（手）主水襲称主水。冬夏事記曰、去年冬之戦至（主）水有故大罵掃部頭。決応（志）必死。今夏入京師与石見守永訣。乞良馬而出。兄志摩守送之曰、

勿忘去年之言。主水曰、何敢忘（忘）。遂戦死。大草松平系図曰、時年二十八。神祖甚惜之

・廣瀬左馬以下知名の士三十余人及び山口重信皆戦死す。直孝兵を進め旌を秉（と）り衆を励まして曰はく「敵兵多からず。又後継無し。宜しく急撃すべし」と。大軍斉（ひと）しく奮ひ皆殊死（しゅし）戦ふ。重成の兵疲れ新兵に敵する能はず悉く敗れ走る。飯島三郎右衛門、重成を諫めて曰はく「右府の事今日に止まず。請ふ、城に還り以て後挙を図らん」と。

冬夏事記曰、青木四郎右衛門・早川茂大夫・梨重成使退。今従若江合戦記。本書曰、三郎右衛門善射。射殺数人。重成乗勢敗直孝前鋒。去年志貴野之戦亦射我軍有功。秀頼賞之

重成曰はく「吾自ら城を出で必死を以て誓ふ。縦ひ生を全うし以て功を立つとも恩を地下に報（かえ）すに如かず」と。遂に進み力戦し勇を奮ひて死す。時に年二十三。時の人其の忠烈を惜しまざる莫し。安藤長三郎其首を獲る。

冬夏事記曰、庵原助右衛門以十字槍鎗長門守仆之田中。従卒二三人撃殺之将取首。安藤長三郎来謂助右衛門曰、吾今日未獲級。願賜之。助右衛門曰、子尚年少。其志可嘉。此本（木）村長門守之首也。吾得之不是（足）以為功。大阪城陥、在今、明日之中。則他日難得如此好首級。遂授之。以為長三郎之功

山口弘定・

内藤政勝・佐久間藏人 冬夏事記作奥野藏人入道宗信誤。宗信七日自殺在下文。今従難波戦記・松栄紀事 ・河崎和泉・波多野兵庫・牟禮彦三郎・村上十大夫・篠岡右京・大塚勘右衛門・松浦左吉・黒木藤七郎・青木四郎左衛門・早川茂大夫・山口知徳院及び平塚為廣の二子皆戦死す。城中驍勇の士、是に至り多く死す。八田金十郎、弘定の首を獲り、日下部源太郎、政勝の首を獲る。正木舍人、藏人の首を獲り、直孝凡そ三百十五級を獲る。 駿府記・家忠日記・德川記・慶元記・松栄紀事。但、駿府記十五作五十。今従難波戦記・大阪首帳。為廣二子戦死拠松栄紀事・難波戦記・冬夏事記。戦死之士有平塚熊之助。蓋其一也○難波戦記曰、直孝之兵河野六兵衛・戸渡太郎右衛門・丸山八郎左衛門・成島彦右衛門・斎藤市之允・内山五郎右衛門・藤田四郎左衛門・岡部總右衛門・石黒傳左衛門、戦功尤著也。謂之十本槍。按ずるに、十本槍一人を闕く。一本に戦死も亦然か云ふ。今考定する所無し 近藤秀用十級を獲り長屋平大夫・青木七左衛門を禽ふ。 冬夏事記本書曰、若江戦敗二人故（欲）混佐和山之兵而北 去。以甲己（色）異被虜 神祖、城兵の出づるを聞き久世廣宣・阪部廣勝・本多正重を高虎・直孝の陣に遣はし、機に乗じ之を撃たしむ。親ら兵を

将ゐ角南に至る。三使未だ至らざるに、戦已に畢る。駿府記・家忠日記 高虎・直孝、重成・弘定・政勝の首を平岡に上る。神祖塗(途)に在り輿を停め之を覧る。難波戦記曰、重成期必死暁奇楠香薫髪。故其首発香。神祖褒之曰、長門守年女（少）、木（未）更事。而能至此耶。可惜壮士也。或曰、長門守不利月額。可見不必死期死也。神祖命取其胄。使検忍緒。結緒截之。示其不再載胄。乃知其決志赴死。人皆服神祖之思慮周摯也 山口弘定、重成の妹夫にして松平正綱と姻戚たり。故に正綱其首を得るを乞ふ。神祖之を許す。難波戦記・冬夏事記 木村主計頭三百余兵を率ゐ山田村に陣す。若江北を距つること六七町ばかり。榊原康勝・小笠原秀政、水を隔てて陣す。秀政進み之を撃たんと欲す。監使藤田忠季、之を止めて曰はく「此れ深き沼なり。渉るべからず。渉らば必ず陥つ」と。康政(勝カ)の部兵直地に進みて渉る。水浅く泥漳無し。前鋒村上彌右衛門・原田權左衛門先登し陣を陥す。中根善右衛門戦功最たり。康勝、衆を励まし奮撃し之を大破し七十八級を獲る。主計頭還り戦ふも終に敵する能はず。兵を引き城に入る。秀政、康勝の捷を聞き甚だ之に恥づ。

家忠日記・難波戦記・若江合戦記。康勝渉水拠松栄紀事○冬夏事記曰、康勝欲撃之（主）計頭。能登守止之曰、佐和山之兵部伍不整。必為所敗。敵乗勝而来。我横撃之、可以制勝。康勝之字（宰）伊藤忠兵衛従之不許出戦。既而掃部頭得大捷。主計頭亦敗走。康勝之兵皆憤、忠兵衛恥之。翌日戦死。忠兵衛之子内記訴于両御所。故遂（逐）能登守。与此異。按ずるに、秀政戦ひ得ざるを恥ぢ翌日天王寺口に戦死す。事実明日（白）たり。冬夏事記蓋し伝聞の謬なり。今山（上）諸書に従ふ

日既に午を過ぐ。総督忠輝、方に片山戦場に至る。敵兵悉く引き去る。衆皆其の戦期に後るるを憤る。将校花井主水・皆川老圃等

山城守廣照剃髪号老圃。神祖嘗使廣照子養忠輝。故今従軍

忠輝に大阪後軍と戦ふを勧む。忠輝聴かず。玉蟲対馬・林平之丞を召し其可否を問ふ。

難波戦記曰、対馬、武田信玄之士、城但（伊）庵弟。平之丞嘗事堀秀政。二人老於戎事政（故）忠輝召為臣

二人対へて曰はく「日既に西に傾く。敵地形を諳り我審らかにする能はず。接戦し夜に入らば則ち必ず敗を取る。明日攻城鏖戦（徹底的に戦う）し人の耳目を驚かすに如かず」と。忠輝之を然りとし兵を按へ進まず。明日城陥ち又期に赴く能はず。座し大軍を擁し、終に一人も大阪の旌旗を見る者無し。

神祖忿恚（ふんい）す。忠輝是より罪を得。松栄紀事曰、日午忠輝率大兵而至。即趣松平政宗進兵撃敵。政宗曰、我軍力戦数合兵馬皆疲。且地近敵城。日亦向晡。接戦入夜必将見敗。不可妄動兵馬。故忠輝不進。一説載玉蟲〔対カ〕馬・林平之丞之譜（語）与徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記合。今従之 大阪後軍毛利勝永・小倉行春・大野治房・其弟道見、兵二万五千有り。前軍の敗を見、松平政宗と合戦す。政宗、兵を誉田廟前に遮（進）め数千銃を発し之を撃つ。敵支ふる能はず。会（たまたま） 大野治長・渡邉尚・眞田信仍、兵三万を率ゐ継ぎ至る。敵兵又振ふ。松栄紀事 既にして兵を収め城に還らんと欲す。眞田信仍後拒を為す。政宗の前鋒片倉盛重軽兵を以て挑戦す。信仍還り戦ふ。進退すること数回。両軍の死者数百人。松平信濃守定眞力戦し級を獲る。定眞戦功諸書所不載。冬夏事記曰、大御所猶子松平信濃守来自麾下力戦。拠久松系図。松平隠岐守定移第四子定眞任信濃守。為長島城主定勝。神祖異父同母弟也。故以其子准姪 渡邉尚、信仍に代はりて戦ふ。手づから我兵二騎を斬り傷つきて退く。信仍又尚に代はりて戦ふ。筑（ママ） 兵の死者二十余人。信仍も亦傷す。然れども猶ほ殊死戦ふ。小倉行春、之に代はり鉄

騎六百を以て悉力決戦す。盛重戦ひ疲れ両軍交綏し（こうすいしりぞく）相距つること七八町。本多忠政、城兵と対陣す。一柳直盛、忠輝の部下に在り。敵陣の旌旗動揺するを見、忠政の陣に馳せ至り謂ひて曰はく「城兵将に退かんとす。之を撃たば必ず勝つ」と。忠政曰はく「我も亦戦はんと欲す。然れども衆寡敵せず。之を奈何為（いかんせ）ん」と。直盛曰はく「然らば則ち援を政宗に乞はん」と。忠政之を然りとし、使を政宗の陣に遣はす。水野勝成も亦政宗に兵を進むるを勧む。政宗辞して曰はく「我前鋒、卯より午に至り力戦す。士馬皆疲れ復び戦ふ能はず。宜しく援を越後少将に乞ふべし」と。乃ち使を忠輝の陣に遣はす。忠輝之を拒みて曰はく「両御所の会（命）有るに非ずんば則ち兵を進むるを得ず」と。直盛、忠政に謂ひて曰はく「敵潰走の形有り。今之を急ぎ撃たば則ち一以て百に当つべし。請ふ、我先登せん。卿宜しく継進すべし」と。辺巡（逡巡の間）問に敵将胥（あい）議る。「日将に晡（くれ）んとす。班師するに如かず」と。眞田信仍火を近邑の民屋に縦ち其煙燄に乗じ殿（しんがり）して去る。直盛・勝成皆憤惋（ふんわん）

（いきどおり歎く）**たり**。　難波戦記曰、大阪援軍眞田左衛門佐・毛利豊前守・伊木七郎右衛門等兵二万見後藤又兵衛戦敗。欲全軍而還。左衛門佐徐引兵退。前軍敗兵見眞田之旗幟。梢（稍）々来集。松平政宗之兵追撃。奥田・眞田還戦。列（別）隊将小倉作左衛門合軍馳突。敵乗其機鳴鼓進攻。北川二郎兵衛・丹羽河内守亦来代（戦）横撃、政宗之軍前鋒敗走敵兵尾撃之。政宗大軍整陣列銃撃之。渡邉内藏助被創而還。前田主水・南部左門・山川帯刀・北川二郎兵衛等鋭志挑戦。東軍諸将疑政宗有二心、猶予不進。政宗前鋒亦多死傷故不進。戦両軍相待（持）。移時日既晡。大阪将佐分軍為二。左衛門佐為殿日暮入城。徳川記曰、薄田・井上戦死。敵兵敗走。槙島玄蕃父子張陣撃我軍乗勢而退。後藤之後軍明石・長岡・山川・小倉・北川等戦敗来走。眞田・毛利・伊木・渡辺・大谷及大野治長之部兵堅陣不動。東軍諸将軍議不〔一〕察機。移時敵兵皆引去。慶元記曰、眞田左衛門佐・渡辺内藏助・毛利豊前守・大谷大学等当藤井寺前張陣。東軍本多美濃守対之。左軍徳永左馬助使歩卒放銃。敵兵亦発銃相争。既而収兵。左馬助亦収歩卒。美濃守又使歩卒放銃挑戦敵陣不動。美濃守収兵。敵陣旌旗動揺。一柳監物馳来美濃守之陣謂曰云云。冬夏事記曰、眞田左衛門佐兵七八千与福島伊豫守之子武蔵守・渡辺内藏助・大谷大学・伊木七郎右衛門等追（進）自住吉大路而来。毛利豊前守・槙島玄蕃頭先左衛門佐而陣于誉田。政宗前鋒片倉小十郎・石母田大膳与戦而敗走。左衛門佐進撃之。小十郎

還戦。左衛門佐戦敗西走七八町。内藏助被創。政宗率兵追撃。左衛門佐隔池為要害整陣撃政宗破之。政宗走入誉田街市。片倉小十郎・真木大藏力戦、左衛門佐戦勝収兵与豊前守合。左衛門佐子大助十六歳与東兵田（相）搏。獲首級傷殿提首来。豊前・玄蕃大賞之。時城中馳使告矢尾・若江之敗。使亟引兵還。左衛門佐・豊前守将還。東軍自道明寺河原西至誉田。敵兵自誉田之西至藤寺守（井寺）前張陣相持。一柳監物・菅沼織部列歩卒発銃。左衛門佐亦使発〔　〕互争。政宗与小臣二三人騎而来于水野日向守之陣。監物・織部請戦。日向守謂政宗曰、撃破豊前守甚易。眞田陣于其前。横撃邀後則我兵無生路。卿須出兵備眞田則我撃豊前走之。政宗辞曰、我兵今朝大戦頗多死傷。不得復戦帰其営。日向守曰、然則我与松平下總守・本多美濃守合軍撃之。使監使中山勘解由告二人。下總守従之。美濃守依違不決。晡時左衛門佐・豊前守故（放）火退軍平野。按ずるに、東軍盛大たり。諸書各諸将対する所に拠りて之を書く。故に記する所同じからずと雖へども其の要は一なり。慶元記・松栄紀事頗る水野勝成記と合ふ。今之に従ふ

監使又諸軍に令して曰はく「今日の戦に藤堂高虎・井伊直孝の兵皆疲労す。明日の前鋒天王寺口は越前少将に命じ岡山口は松平筑前守に命ず」と。　徳川記・慶元記

是夕、忠直、其宰本多冨正・本多成重を平岡に遣はし朝（明）日の軍令を稟（う）く。　徳

川記・慶元記・冬夏事記並云、是夕、神祖陣于千塚。大将軍陣于道明寺側。拠駿府記、神祖・大将軍在千岡未嘗移陣。

今従之 神祖三(二カ)人を召し謂ひて曰はく「旦日の戦に、井伊掃部頭・藤堂和泉守・榊原遠江守、皆力戦勲を建設。越前の兵何ぞ其れ懈(おこた)るや」と。明日の前鋒既に松平筑前守に命ず。冨正・成重、惶恐して出で帰り忠直に報ず。忠直大いに慚恚(ざんい)し以て必死を期す。吉田修理 関原記・大全曰、修理、内記長英第二子。初称石橋彦四郎。事織田信雄。後事関白秀次 忠直に白(もう)して曰はく「臣嘗て関白秀次に事(つか)へ能く大阪の地形を諳(し)る。願はくは前鋒を以て臣に命ぜよ」と。忠直之を許す。乃ち秝馬蓐食(まつばじょくしょく)し(馬も人も英気を養った)以て戦期に赴く。 難波戦記・松栄記事○冬夏事記曰、五日忠直卿陣于四除(條)畷。終夜飲宴。六日朝宿醒未解。道明寺・矢尾・若江雖去営甚近。而不知其戦。故神祖怒之

烈祖成績巻之十四終